

性別体験教室 キャラクター紹介



かおる
←香瑠 (♀)
ボーイッシュな見た目のとおり
男勝りな俺っ娘。



みのり
美穂 (♂) →
可愛い見ただけで、実は男の娘。
女の子願望を抱いている。

性別体験教室

第1話

「香瑠ちゃん、ちゃんとクラスのみんなにも教えてあげてね？」

カウンセラーの先生に誘われる形で、朝のホームルーム中に二人の生徒が教壇の上に立たされていた。

クラスメート達が続々と注目を浴びせる中、先生は傍にいる生徒に耳打ちをし始める。教壇の上に佇んでいる二人には、これから大切な発表が待ち構えていた。

「もう、先生つてば。オレをちゃん付けで呼ばなくっても……ちよつと照れくさいけど、これからオレ……男子として過ごすことになったから。これからもよろしく」

最初に名前を呼ばれた『香瑠』と言う生徒は照れ隠しのために、わざと先生の前で強がつてみせる。

これから自分が『男の子』過ごすことになった事実を、ためらいもなくクラスメート

達の前で言い放っていく。

香瑠は短く切り揃えた髪やホットパンツなどの身軽な格好に身を通して、ボーイッシュな印象のある生徒だった。

思春期を迎えた頃合いにも関わらず、これから『男の子』として過ごすようになった香瑠だけ、本人は少しも氣に留めようとなしない。

「そ、それじゃあ香瑠……これからオレ達と同じ『男の子』として過ごすって言うのか?!」
「香瑠ちゃんって女の子じゃない? 本気で今日から男子になっちゃうつもりなの?!」

あまりにも意外な香瑠の発表に、クラスメート達もすぐに驚きの声を上げる。

本来なら香瑠は女の子にも関わらず、見た目と同様に活発な……と言うよりはお転婆な性格が災いして、教室内でも女子達よりも男子達と触れ合う機会が多かったけど、まさか今朝から『男の子』として過ごすなど、男子も女子も思わなかったのだ。

本来なら女の子であるはずの香瑠が、これから別の性別として振る舞うなど受け入れ

られそうにない。

「そ、そんな驚かなくったっていいじゃんか。男子として過ごすことになっても、別に今までと何も変わらないんだからさ……」

周囲から驚きの声を受けた後も、香瑠は少しもひるまずに返事を返していく。

本来なら女の子であるはずの自分自身を思い知らされながらも、香瑠は教室内で普段過ごしているまま、これからも男の子っぽく振る舞ってみせると言い切ってみせる。

クラスメート達の言葉を受けて、事の重大さに気づき始めた香瑠だけど、大事な発表の後ですぐ引き下がるわけにはいかない……

「香瑠ちゃんの次は美穂くん……いいえ、これからは美穂『ちゃん』ね？ しつかりとクラスみんなに自己紹介しましょうね？」

少し緊張気味な香瑠の姿を確かめながら、先生は隣の生徒にも挨拶を促していく。

男の子っぽい格好を続けている香瑠と別に、隣で立ち尽くしていた生徒も自分の発表を控えていた。

隣の生徒はフリルやリボンの施された衣服を身に纏って、クラスメート達を前に身をこわばらせている……

「はい、先生。これからボクは『女子』として過ごしたいと思います。よ、よろしく……
…お願いします」

先生に促される形で、ついに美穂も口を開いていき、これから身に受ける自らの立場を明かしてみせる。

美穂は肩まで伸ばしたセミロングやガーリッシュな服装のおかげで、可憐な少女のような見た目を保っているけど、実はれっきとした男の子だった。

今までクラスメート達の前では明かせなかった美穂は、これから教室内でも女の子の格好に身を投じられる事実を心の奥底から嬉しがっていた……それでもクラスメート達から続々と向けられる視線に、さすがに腰が引けてしまう。

「うわあ、ホントに美穂くんなの？　こんなに可愛らしくなっちゃって」

「もしかしたら私達より可愛らしいかも……本当に女の子みたいだね、美穂くん」

美穂が『男の娘』として振る舞う姿を初めて目にしたクラスメート達は、早速可愛げな姿に視線を寄せ始める。

最初は転校生かと思ったほど、可愛らしい姿の正体はクラスの誰一人として知らなかった……それでも声色からクラスメートの美穂だと分かると、今までと違う意識を抱かずにいられない。

特に女子達は、美穂の意外な姿に驚かされるとともに、今までにない意識を芽生えさせてしまう。

これから自分達と同じ『女の子』として過ごすと言う美穂に対して、女子達はすぐに関心を寄せていく。

「う、うん。今でもちよつと恥ずかしいけど。どうしてもボクのありのままを見せたく

って……」

フルフルフルッ……

クラスメート達から熱い視線を注がれて、美穂はますます緊張を抱え込んでしまう。今までは誰の前でも見せたことのなかった姿を、ついに美穂は教室の中で見せつけてしまった。

今までは一人つきりで楽しんでいた格好をクラスメート達の前でも明かして、忌み嫌われることもなく受け入れてもらえたのが嬉しい反面、自ら抱え込んだ本性を明かした後では照れくさくてたまらない。

（やっぱり、美穂も緊張しちゃってるんだ。昨日と違う性別のままで過ごすのって、オレもちよつと照れくさくなつてきちゃったな……）

隣で赤らめた顔を伏せ始める美穂の姿を、隣にいる香瑠も意識させられてしまう。本来なら自分が美穂のように、女の子らしい格好に身を通さなければいけない事実を

思い知らされると、今までと違う性別のままで過ごしても良いものか、香瑠も段々と迷い始めていた。

自分と同じように緊張を感じているのか、ぎこちなく身をこわばらせている美穂の姿を、香瑠も思わず隣で見つめてしまう……

「でも先生、どうして香瑠ちゃんと美穂くんが……これから男子や女子として過ごさないといけないんですか？」

普通なら考えられない二人の発表を終えて、クラスメートの一人がすぐに質問を投げかけていく。

いくら香瑠がボーイッシュな格好を続けたり、美穂が女の子の格好に身を投じているとしても、どうして本来あるべき性別と違う立場のまま教室内で過ごすことになったのか、今でもクラスメート達は理解出来なかった。

思春期を迎えた微妙な時期なのに、本当に二人が性別を変えたまま過ごせるのか不安でたまらない……

「ちゃんと二人が自己紹介出来たみたいだから、クラスのみんなにも教えてあげないといけないわね？　みんなにも分かりやすいよう説明してあげるから、最後までちゃんと聞いててね……」

クラスメート達から飛んできた質問に、先生はすぐさま答えてみせる。

どうして香瑠と美穂が違う性別として過ごすことになったのかを、ホームルームの時間を掛けて説明してあげようと目論んでいく。

二人に特別な立場を与えるに当たって、クラスメート達にも納得してもらう必要もあったのだ……

「そうなんだ、確かに香瑠ってば……下手すりゃオレ達より走るのも早いし、女子だって言う方が無理あつたもんな？」

先生の口から開かされた説明に、クラスメート達はますます驚かされてしまう。

普段から男勝りな雰囲気のあつた香瑠が、少しも女の子らしい自覺を抱いてくれなかつたので、逆に『男子』として過ごさせてあげるべきだと先生が言うのだ。

今まで考えもしなかつた事實を思い知らされた後でも、男子達はすぐさま納得させられる……それだけ香瑠は活発な女の子で、男子達も手を焼いていたのだ。

「もう、あんまり香瑠ちゃんをからかわないの……でも、これから私達も香瑠『クン』って呼んであげないといけないわね？」

相槌を打ちながら頷く男子達の反応に、先生もあつけなさを思い知らされる。

本来なら女の子であるはずの香瑠を、いとも簡単に男子として受け入れる決意を決め込んでしまったのだ。

本当に男子として振る舞ってしまうのか、今でも少しだけ悩んでいた先生だけど、香瑠の新しい立場をしつかりとクラスメート達に教え込んでいく。

「それじゃあ美穂くんも、香瑠ちゃんみたいに……女の子のままでも過ごし続けるんです

か？」

香瑠の抱えている立場を無事に明かした後、女子達も不安な気持ちを明かしてきた。

いくら自分達と同じような格好を続けていたとしても、本当に美穂を『女の子』として受け入れても良いものか分からずにいたのだ。

髪まで可愛げにピッグテールへと結えている美穂だけど、どんなに女の子として努めようとしても、性別は男の子そのものに違いははずだった。

「そうよ、香瑠ちゃんと違って美穂ちゃんは大人しい子だったし、ずっと女の子の格好に憧れてたのよ。今着ているワンピースだって、ずっとクラスのみんなに見せてみたかったらしいのよ……」

戸惑いの表情を見せる女子達をなだめるようにして、先生は美穂の抱えている事情を説明することにした。

今までは男子として過ごしていた美穂だけど、ずっと女の子の格好に憧れていたと言

う悩みを聞かされていたのだ。

美穂の抱え込んだ気持ちを確かめた上で、思い切って『女子』として過ごして振る舞ってみるように促していくと、本人が感激の表情を見せていたのを先生は振り返っている。

教壇に立っていた香瑠と美穂は、それぞれ重大な『性』の悩みを抱え込んでいたのだ。

「せ、先生つてば。それでもボク、もう自分にウソなんてつけないから。これからもよろしく……お願いします」

先生の口から開かされた本心を恥じらう美穂だけど、改めてクラスメート達の方を振り向いてみせる。

今まで穿いていたズボンとは違う、裾から風が入り込むスカートの感覚に、美穂は自然と胸を躍らせていく。

これからはクラスメート達の前でも、気兼ねなく可愛げな格好が出来る事実が、今の美穂には何よりも嬉しくてたまらない……

「香瑠くんは男子として、美穰ちゃんは女子として過ごさせて欲しいの。みんなにも協力を頼めるかしら？」

二人の姿をしつかりと見据えた後、先生は別の頼みごとをクラスメート達に促していく。

これから男子として過ごす香瑠と、女子として過ごす美穰をみんなで受け入れて欲しいと言うのだ。

今まで性の悩みを抱えていた二人に別の体験させてあげること、今までより気軽に教室内で過ごし続けられるはずだと先生は考えていた……

「そんな、本当に香瑠をオレ達の仲間にしちゃって良いのか？ ホントは女子なはずなのに……」

「それに美穰くんも、私達と同じ格好をしてるって言っても……やっぱり男の子なんだよね？」

別の立場を抱えた二人のお世話を頼まれたクラスメート達は、どう返事を返せば良いか思い悩んでしまう。

二人の抱えている事情を知り尽くした後だとしても、本当にあべこべな性別の香瑠と美穂を受け入れられるのか、今でもクラスメート達は戸惑っていたのだ。

それでも教壇の上に立っている二人は照れながら、少しも教壇の上から逃げ出そうとしないので、クラスメート達も本気なのかと尋ねずにいられない。

「べ、別に今までと何も変わらないから良いじゃんか。それじゃあみんな、これからもオレをよろしくな？　ほら、美穂も挨拶しようぜ……」

目の前で戸惑うクラスメート達へと、香瑠は抱えている気持ちを改めて明かしていく。これから自分を男の子として扱っても構わないと、美穂は自分の口から説明し始める。本来とは違う性別として振る舞うことに特別な意識を思い知らされていた香瑠だけど、今までも男子達と親しくしていたことを踏まえながら新たな立場に胸を張ってみせる。

「あ、あの……まだ少しだけ恥ずかしいけど、よろしくお願いします……」

男勝りな態度を見せつける香瑠につられる形で、美穂も恐る恐る口を開いていく。

今でもスカートから伸びる脚を震わせる美穂だけど、一度明かした自分の気持ちにウソなどつけなかった。

何度もスカートの表面を撫で付けながら、今までずっと望んでいた女の子としての格好を美穂は確かめて、ありのままの自分自身を受け入れてもらうために頭を下げていく。

「ちゃんと二人も挨拶が出来たみたいね。それじゃあ一時間目の授業を始めましょうね………?」

香瑠と美穂が改まった挨拶を済ませた後、先生はホームルームを締めることにした。クラスメート達も驚いて当然な発表を二人がやり遂げたことで、やっと先生も胸を撫で下ろすことが出来る。

二人を受け入れて欲しいとクラスメート達に促しながら、いつもどおりの授業へと気分を切り替える……

* * *

「なあ、香瑠。ホントに着替えもオレ達と一緒に構わないのか？」

体育の時間を迎えそうになった時、男子達はすぐに香瑠へと尋ね始める。

普段なら女子と合流するはずの香瑠が少しも立ち去らずに、自分達と一緒に教室へ残っているのが気になり始めていた。

それでも香瑠は男子達に交ざって、体操着袋を準備し始めている。

「いーじゃん。これからはオレも男子なんだから……みんなと同じ短パンだって用意してもらったんだからな？」

不意に男子達から声を掛けられた後でも、香瑠は少しも気に掛けずに衣服を脱ぎ去っていく。

これから一緒に体操着へと着替えるのが気になった男子達に対して、香瑠は体操着袋から新しい短パンを取り出しながら見せつけてみせる。

今まで穿いていたブルマと違って、体育の授業中も男子達と同じ格好が出来ると思うだけで、香瑠には嬉しくてたまらない。

（ちゃんと先生から用意してもらったんだ……新しい短パンも、みんなと同じブリーフだつて穿いてきたんだからな？）

男子達が様子を窺ってくる間も、香瑠は気兼ねなくホットパンツを下していく。

香瑠は何と周囲にいる男子達と同様に、真っ白いブリーフまでも見に付けていた。

いつも穿いているショーツよりも腰ゴムの辺りがキツい感覚を気に掛けながら、香瑠は男子として振る舞えるのが嬉しくてたまらない。

今までは女子扱いだった自分が、これからは男子として過ごせる証しを香瑠自身も確

かめていく……

「香瑠ってばホントに、オレ達と同じ男子として過ごすつもりなんだな？」

「まさかブリーフまで穿いてくるなんて思わなかったけど……さすがにコレは真似出来ないだろ？」

スルスルスルツ……

着替えの時も自慢げに笑みを浮かべている香瑠に対して、男子達はあるイタズラを仕掛けることにした。

まさか短パンやブリーフを身に付けてまで、自分達の仲間入りを果たそうとする香瑠の気持ちを、男子達はどうしても揺さぶってみたかった。

半ズボンに手を掛けた後、傍にいる香瑠に見せつけるために、ブリーフごと一気にずり下ろしてみせる……

フルンツ。

「あうんっ……！ 急にオチンチンなんて見せてくるなよおっ！ 別にブリーフまで脱がなくなつても良いじゃんか！」

不意に男子から見せつけられた股間の存在に、香瑠は思わず悲鳴を洩らしてしまう。男子達がわざとズボンを下ろして、股間にぶら下げているオチンチンを向けられた後で、さすがに香瑠もひるまずにいられない。

男子達の心無いイタズラを見せつけられた香瑠だけど、顔を逸らしながら反論をぶつけていく。

いくら男の子っぽく振る舞っている香瑠でも、あまり目にしたことのないオチンチンの存在には戸惑いの気持ちを抱え込んでしまう。

「別にいいじゃん、香瑠も今日から男子なんだろう？ 別にチンチンを見ちゃったくらいで驚くなよ？」

明らかな動揺を見せてきた香瑠に対して、さらに男子達は詰め寄ってみせる。

香瑠はこれから自分達と同じ『男子』として過ごすことになったのだから、別にオチンチンを見せつけても平気なはずだと言うのだ。

無理にでも自分達の真似事を続ける香瑠に対して、徹底的な差を見せつけようと男子達は目論んでいた。

フルンツ、フルンツ。

「そんなに押し付けてくるなよお、まだ着替えだつて済んでないのにいつ……くううつ！」

男子達が続けるふざけ半分のイタズラに、香瑠は上手く返事を返すことが出来ない。今でも太股までブリーフを下した先には、自分の身体には存在してない代物がぶら下がっていて、腰の動きに合わせて揺れ動いてくる。

あまりにも奇妙な形状の物体を見せつけられたせいで、香瑠はひたすら視線を逸らすことしか出来ない。

（どうしよう、これから男子達と気兼ねなく過ごせるはずなのに。 どうしてオチンチンなんて見せつけてくるんだよおっ）

自分の身体には決して存在しないオチンチンの存在を思い知らされて、香瑠はずっと困り果てていた。

今まで男子達とともに過ごすのを待ち望んでいたはずなのに、男の子として振る舞おうとすればするほど、香瑠は男女の違いを思い知らされてしまう。

男子達と同じくブリーフや短パンを身に着けてみても、股間の間で揺れ動くオチンチンの存在や、さらには自分の裸を男子達の前で晒す状況にも恥じらいの気持ちを抱き始めていた。

それでも香瑠は気持ちを吹っ切るようにして、男子達と同じ体操着姿へと身を通していく……

* * *

「えいっ！」

グルンツ……！！

無事に体操着へと着替えることが出来た香瑠は、体育の時間を今まで以上に張り切っていた。

高鉄棒の上に脚を乗せると元気良く回って、一気に加速をつけて手を離してみせる。香瑠は周囲にも見せつけるかのように、一番の得意技であるグライダーを繰り出してみせたのだ。

「うわあ、あんなに飛んじゃってるよ？ あそこまでの距離はオレ達でもなかなか出来ないって言うのに」

「今日も相変わらず新記録だな、香瑠……」

勢いよく飛んでいく香瑠の姿に、男子達も思わず視線を奪われてしまう。

自分達より背が低い方にも関わらず、香瑠の身体が鉄棒からかなり離れた場所まで到

達していた事実にも男子達も圧倒されていた。

香瑠は抜群の運動神経を誇っていて、下手をすれば男子達でも敵わないほどだったのだ……

「当たり前だろ？　これからオレだつてみんなと同じ『男子』なんだから。これくらい余裕で飛べるんだからな？」

茫然と立ち尽くす男子達の方へと駆け寄りながら、香瑠は自慢げにグライダーの飛距離を自慢してみせる。

着替えの時間に思い知らされていた、恥じらいの気持ちを吹っ切るようにして飛んだグライダーによつて、男子達の鼻を明かせたのが嬉しくてたまらない。

オチンチンをしつこく見せつけられた腹いせとともに、香瑠はどうしても自らを男子の仲間として認めてもらいたかったのだ。

（どうしよう、ホンキで香瑠ったらオレ達と一緒に過ごすつもりみたいだぜ？）

（いくら先生に頼まれたって言っても、オレ達も困っちゃうから……こんなのはどうだ？）

グライダーの距離を自信ありげに語ってみせる香瑠に、男子達も思わず頭を悩ませてしまう。

いくら本人が訴え続けても、昨日までは女子だった香瑠を自分達の仲間として受け入れるなど、男子達には到底考えられなかったのだ。

それでも香瑠は自らの活躍を自慢げに見せつけながら、無理にでも仲間に入ろうと思いつ込んでいる始末なので、男子達も負けじと耳打ちしながら別の反撃を企てていく。

股間にオチンチンなどをぶら下げてない香瑠など、男子達はどうしても仲間に迎え入れられなかったのだ……

* * *

ギョッ。

「は、離せよ！ 急にオレを捕まえてきて、一体何を始めるつもりなんだよお……！」

放課後を迎えた教室内で帰り支度を済ませていた矢先、急に男子達から取り囲まれた香瑠は、さらに身体を取り押さえられてしまった。

しつかりと羽交い締めにされた後、どんなに身を振じらせても男子達の手を撥ね退けられず、香瑠は少しも身動きが取れない。

さらには目の前にいる男子達が笑みを浮かべてくる状況に、香瑠はムキになって言葉をぶつけていく。

これから男子達がどんなイタズラを仕掛けられるのか分からないまま、香瑠は内心焦り出していたのだ。

「これから香瑠には、男子として耐えて当然な『試練』を与えてやるから覚悟しろよな？」
「オレ達は余裕で耐えられるんだから、きっと香瑠も耐えられて当然だろ？」

今でも生意気な口調をぶつけてくる香瑠に対して、男子達はある行為を仕向けてくる。もしも男子として振る舞いたいなら、自分達が遊び半分で続けている行為を耐えてみるようにと香瑠に言いつけてきた。

背の低い香瑠をしつかりと取り押さえたまま、さらに床へと寝かしつけていき、男子達は面白半分に片脚を持ち上げていく。

「な、なあ。もうオレの脚を離してくれよ……ひ、ひううんっ！」
グイツ、グリユグリユグリユツ！

今までにない刺激を股間に押し付けられて、香瑠はすぐさま悲鳴を洩らしてしまう。気づいたら香瑠は両脚を掴まれたまま持ち上げられて、思いつきり股間を踏みつけられていたのだ。

男子達の手で仕向けられた電気アンマを身に受けるたび、香瑠は何度も上半身をよじらせながら身悶えるけど、両脚や肩まで押さえつけられてしまい、激しい刺激から少しも逃れられずにいた。

男子の足から執拗に押し付けられる股間への刺激に、香瑠はどうしても身悶えが収まらない。

ホットパンツやブリーフに阻まれているとは言え、男子の足によつて踏みつけられる刺激のせいで、香瑠はどうしても声を洩らさずにいられない……

「チンチンの付いてるオレ達なら5分くらいまで平気なんだから、香瑠もしっかりと耐えてみせろよお」

「こんなに悲鳴まで上げちゃつて、もう香瑠ったらへバつちやつたのか？」

あられもない悲鳴を上げ続ける香瑠の姿を見下ろしながら、男子達はますます調子付いていく。

体育の時間には自慢げに張り切っていた香瑠が、自分達の手でいとも簡単に屈してしまふ状況が面白くてたまらない。

しっかりと自分達の手による制裁を受けるよう言いつけながら、少しも電気アンマの手を緩めない。

どんなに香瑠の股間を踏みつけても、上履き越しにオチンチンの感触を確かめられない状況に頭を捻りながら、それでも床の上で暴れ回る香瑠の姿に興奮を募らせていく。今まで調子付いていたはずの香瑠が、自分達の前で着々と弱り果てていく姿が面白くてたまらない……

「そ、そんなあ。もうお願いだから足を離してくれよお……ひゃうんっ！」
グリグリグリッ……

あまりにも執拗に与えられる股間の刺激に、香瑠は思わず泣き言を洩らしてしまう。いくら男子達なら耐えられて当然だと言い聞かされても、激しい電気アンマに香瑠の股間が耐えられそうになかった。

何度も上履きの底で股間を踏みつけられるたび、香瑠は激しい痛みに表情を歪めていたけど、どんなに弱音を吐いても男子達は許してくれない。

最初はどんなイタズラでも耐えてみせようと思いついていた香瑠だけど、股間を幾度となく弄られるたびに身悶えながら、段々と気持ちが届いてしまう……

（ど、どうしよう……このままじゃオレのお股、おかしくなっちゃうよおっ……！）

男子達からの激しいイタズラを強いられて、香瑠は今まで身に受けたこともない意識にも気づかされていく。

上履き越しに何度も股間を踏みつけられて単純に痛いだけでなく、何故か身体の奥底が熱くなっていく感覚にも見舞われていた。

ケンカ程度なら男子達にも負けないつもりでいたのに、思いっきり男子の足で股間を刺激されるたび、下半身の力がひとりでに抜けていくような感覚を思い知らされる。

今までにない感覚を着実に呼び起こされて、香瑠はあと少しも耐えられそうにない。

どんなに必死の思いで嫌がり続けても、周囲を取り囲む男子達は香瑠を逃さないまま、両脚の間に差し入れた足で思いっきり股間を踏みつけてくる……

「も、もうダメえっ……あ、あうんっ！」

カクカクカクツ、プシヤアアアア……



男子達からずっと電気アンマを強いられて、香瑠はついに気持ちが届けてしまった。

身体を取り押さえる男子達を振り払うどころか、寝かしつけられた床から身を起こすことすら出来ないまま、香瑠は激しく下半身を震わせると同時に、今までにない悲鳴まで上げてしまう。

男子達に仕掛けられた電気アンマによって、香瑠は激しい気持ちの昂ぶりを迎えていったのだ。

自分でも上げたことのない喘ぎ声を上げながら、それでも激しい感情が収まらないまま、香瑠は両脚を震わせながら

オシッコまで溢れさせてしまう。

今まで自分でも触れたことのない部分を、男子達の上履き越しに弄られ続けた衝撃に、香瑠はすっかり弱り果てていた。

ここまで股間の辺りが弱い部分だったなど、香瑠は今まで知る由もなかったのだ。

股間から不意に漏れ出したオシッコは少しも収まらず、ずっと穿いていたブリーフやホットパンツにも広がり、さらには下腹部の辺りにも押し寄せて、それでも股間から溢れ出る迸りは収まってくれない……

グシュグシュグシュツ。

「見てみるよ、香瑠ったらオシッコなんてお漏らししちゃってるぜ？」

「香瑠ってば、これくらいの電気アンマも耐えられないのかよ。だらしないなあ……」

床に寝転んだ香瑠の姿を見下ろしながら、今までにない異変を男子達も感じ取る。

ずっと香瑠が身に着けていたホットパンツの内側から、少しずつ液体が滲み出して、ついには裾の部分からも溢れさせてきたのだ。

自分達が仕掛けた電気アンマによって、香瑠はついに失禁まで冒してしまった。

いくら股間を何度も踏みつけたとしても、まさかオシッコを垂れ流すほどだらしないとは男子達も思わなかった……それでも今までと違って弱々しい姿を見せる香瑠を眺めながら、わざとらしく笑みを見せつけてくる。

今まで自分達に生意気な態度を取り続けた香瑠に対して、男子達の威厳をしつかりと見せつけられたのが嬉しくてたまらない。

「ひ、ヒドいじゃなかあ。こんなにオレのお股なんて踏みつけてくるなんて……ぐすつ」
シュルシュルシュルツ……

今でも濡れた下半身を見下ろしてくる男子達の姿に、香瑠は思わず震え上がってしまった。
う。

男子達の仲間入りを果たそうと考えていたにも関わらず、股間を激しく踏みつけられるだけで、ここまで自分の身体が弱り果ててしまうなど考えられなかった。

それでも男子の手で何度も弄られた股間は、激しい痺れがなかなか収まってくれず、

さらには股間の辺りがジンジンするのに合わせて、勝手にオシッコが溢れ出してくる――やっと脚を離してもらった後も、股間から溢れ出る生温かい液体を止められないまま、さらに情けない姿を作り上げてしまう。

みつともなくオシッコをお漏らししてしまった姿を目の当たりにしても、嬉しそうな笑みとともに下半身を睨みつける男子達の姿に、香瑠の気持ちはますます追い込まれていく。

自分の無力さを思い知らされた後で、香瑠は床の上に伏せたまま気づいたら涙まで零してしまう。

今まで感じたこともない感覚に見舞われた後では、泣き崩れることでしか自らの感情を表せなくなっていた。

電気アンマを押し付けられただけでオシッコを垂れ流して、新品のブリーフやホットパンツをオシッコまみれにしてしまい、さらには男子達の前でみつともない姿を晒した事実が悔しくてたまらない。

今まで男の子として振る舞っていた香瑠は、初めて自らの無力さを思い知らされる：

…

第2話

「こつちが工場の地図記号で、ちよつと線が伸びちゃつてゐる方が発電所よ。ちよつと似てゐるから間違えないようにしようね？」

ついに『女の子』として過ごすことを発表した美穂は、クラスメート達とともに授業を受け続けていた。

今まで一人だけで楽しんでゐた女の子の格好を、教室内でも続けているにも関わらず、目の前で普段どおりの授業が繰り広げられている状況を美穂も確かめていく。

周囲にいるクラスメート達の表情を窺えないまま、美穂はひたすら黒板に顔を向け続けていた。

モジモジモジッ……

（どうしよう……ついにボクってば、女の子の格好で授業まで受けちゃつてゐるんだ。クラスみんなに気持ち悪がられないか、ちよつと怖いよお……）

目の前で繰り広げられている授業に聞き入っていたはずの美穂だけど、気づいたら周囲の状況に意識を傾けてしまう。

今でも自分の席に腰掛けていた美穂だけど、自然と背筋が張りつめていく。

自ら望んで身を投じていた女の子の格好を目の当たりにした後、クラスメート達が多きな気持ちを抱えているのか、美穂は一人だけで考え込んでしまう。

女の子としての姿を続ける自分へと、クラスメート達からどんな反応を向けられるのか怖くてたまらない……

「美穂ちゃんの着ているワンピース、とっても可愛いね？」

「それに髪を結んでいるおりボンも似合ってて、今日は随分オシャレさんなのね？」

席の上で大人しくしていた美穂に対して、クラスの女子達が不意に話しかけてくる。

まだ授業中にも関わらず、今まで見せたことのなかった美穂の姿に女子達は意識を吸い寄せられて、ヒソヒソ話まで始めていた。

長く伸ばしていた髪をリボンで結えたり、可愛らしいワンピースまで着こなしている、

美穂の思いも寄らぬ可憐な姿に、女子達もすっかり魅入られていたのだ。

「あ……ありがとう。今日はボクなりにオシヤレしてみたんだ？」

自分の格好を不意に女子達から褒められたせいで、美穂はすぐに照れ始めてしまう。遠慮がちに女子達へと返事を返しながら授業へと意識を向ける美穂だけど、自然と胸を躍らせてしまう。

女の子の格好を続けたまま、ついに女子達にも触れ合うことが出来たのだ。ずっと憧れていた女の子としての生活を、クラスの女子達にも受け入れられ始めた事実が美穂には嬉しくてたまらない。

（良かった、ちゃんと女子のみんなにも認めてもらえたんだ。ボクがこれから女の子として過ごすことを……）

女子達から何気無く投げかけられた言葉を、美穂は何度も胸の中で噛み締めていく。

教室で初めてお披露目した女の子の格好を、ついに女子達にも認めてもらえた事実が、今の美穂には何よりも嬉しかった。

朝のホームルームで自らの秘密を明かした後、美穂はずっとクラスメート達の反応が気に掛けていて、今までずっと気持ちが悪く落ち着かずにいたのだ。

それでも女子達から褒めてもらえたのをきっかけにして、美穂は女の子としての自身に少しずつ自信を付けていく。

（本当はボク、今でも男の子だけど……ずっと憧れてたんだもん。もっと『女の子』になりきって過ごすんだから……）

ずっと女の子の格好に憧れ続けていた美穂だけど、今でも自分の性別が男の子と言う事実に向け目を感じていた。

今まで一人だけで楽しんで、自らの性別を思い知らされて肩を落としていた美穂だけど、今日からは教室内で幾らでも女の子の格好を続けられるのだ。

人前で本来の姿を明かすのが初めてだった美穂だけど、女子達から褒めてもらえたの

が嬉しいあまり、やっと自分の席に身を預けることが出来る。

今日のために選んだとびっきりの格好を、美穰は幾らでも教室内で見せびらかしたかったのだ……

* * *

「ねえ、美穰ちゃん。もしかして着替えも私達と一緒になの？」

「別に良いじゃないの。今の美穰ちゃんは『女子』なんかもんね？」

美穰が女の子として教室内で過ごすうちに、体育の時間が近づいていた。

普段と違って美穰が教室に残っている状況に違和感を覚えながらも、女子達と一緒に体操着へ着替えようと美穰を誘い始める。

本来なら男の子なはずの美穰とともに着替えを始めることに照れくささを感じていた女子達だけど、先生から頼まれたとおりに、とても可憐な美穰を自分達で受け入れようと努めていた。

「あ、ありがとう。ちゃんとブルマだって、用意してもらったんだ……」

女子達から受けた誘いに、美穂は嬉しそうに返事を返していく。

最初は自分と一緒に着替えても良いものか遠慮がちだった美穂だけど、女子達の方から誘われたのが嬉しくてたまらない。

美穂も女子達に交じって、体操着袋から新品のブルマを取り出してみせる。

今までは男子達と一緒に短パンを穿いていた美穂だけど、今日からは女子達と同じようにブルマを穿けることが美穂には嬉しかったのだ。

「ふふつ、美穂ちゃんってば嬉しそうだね？ 私達と一緒に着替えを済ませちゃいましよう？」

「女の子の格好がこんなに似合っちゃうなんて意外だったけど……とっても可愛らしいわよ、美穂ちゃん？」

真新しい紺色のブルマを前に笑みを浮かべる美穂に、クラスの女子達も言葉を掛けていく。

まだ目にして間もない美穂の格好に、女子達はすっかり馴染んでいたのだ。

今まではクラスの中でも大人しい方だった美穂が、ここまで女の子の格好に憧れていた事実を意外に感じながらも、可憐な姿を女子達も目で楽しんでた。

両手で新品のブルマを抱えながら、とても嬉しそうにしている美穂を誘ってみせる。

「う、うんっ。これからもボクをよろしく、お願いします……」

女子達から手を引かれる形で体操着へ着替えようと誘われて、美穂は声を弾ませながら返事を返していく。

今までは一人だけで女の子の格好を続けながら、抱え込んだ気持ちを誰の前でも明かせずに悶々としていたはずの自分が、今日からは女子達とともに過ごせるのが美穂には嬉しくてたまらない。

他の男子達を教室から追い払った後、美穂は待ち焦がれていた女子達とのひとときに

意識を向けていく。

自らの姿を幾らでも振り撒きたいとともに、女子達の可愛げな姿を同じように確かめておきたかったのだ……

「うわあ、今日は随分可愛いブラなんて着けちゃってるんだね？」

「えへへ、実は日曜日に買ってもらったんだ。最近お胸も膨らんじゃって大変なんだよ？」

美穂を教室に招いたまま、女子達は普段どおりに着替えを始める。

着ていた衣服を脱ぎ捨てた後、女子達はすぐにお互いの下着姿を確かめていく。

思春期を迎えたばかりの彼女達にとって、身体の成長具合が一番の関心事だった。

どれだけ乳房が膨らんできたのか、どんな可愛いブラを身に着けているのか、女子達は自らの成長具合を自慢し合うかのように、互いに視線を向けながら確かめていた。

「……あ、いやあんっ」

モジモジモジッ。

周囲にいる女子達に交じって下着姿に見惚れていた美穰は、直後に可愛げな悲鳴を洩らしてしまう。

自分でも女の子の下着を身に着けているにも関わらず、女子達の下着姿を眺めているうちに、美穰の身体にある異変が訪れていた。

ずっと身に着けていた衣服と同様に、薄いピンクのショーツで覆われた下半身の内側で、美穰はあられない現象を引き起こしてしまう。

ムクムクッ。

（どうしよう、みんなと一緒に着替えてる時なのに、こんなに……オチンチンが大きくなっちゃったよおっ！）

自分よりも可憐に見える女子達の下着姿に視線を吸い寄せられるうちに、美穰は何とオチンチンを勃起させていたのだ。

小さな生地に押し込んでいたはずのオチンチンが膨らんで、すぐにでもハミ出してしまいうだった。

思わず両手で股間を押さえながら、下半身の恥ずかしい現象を取り繕っていた美穂だけど、恥ずかしい部分の膨らみはなかなか収まってくれない。

目の前で繰り広げられている女子達の着替え姿を目にするだけで、下半身が熱くなる感じがますます強まってくる……

「ねえ、美穂ちゃんも早く着替えないと体育の時間に間に合わないわよ？」

「もしブルマが穿き慣れないなら、私達が着替えを手伝ってあげよっか？」

なかなか着替えを済ませない美穂に対して、女子達が不意に話しかけてきた。

身に着けていたワンピースを脱ぎ捨てた後、美穂がブルマに脚を通そうとしないので、傍から見ていた女子達もずつと気に掛けていたのだ。

もしも真新しいブルマに脚を通せないなら、自分達が手を差し伸べてまで着替えさせようと仕組んでくる。

「う、うん。ちゃんとボク一人で着替えられるから……」

女子達から話しかけられた言葉に、美穂は思わず肩を震わせてしまう。

ショーツの表面から露わになる股間の状況を、どうしても周囲にいる女子達には気づかれたくなかった。

いくら女の子の格好に憧れ続けても、男の子の証拠を美穂は思い知らされてしまった……それでも着替えを誘ってくれた女子達の前では、あられない事実を目の当たりにさせられない。

今でも様子を窺ってくる女子達に返事を返しながら、下半身の状況を悟られないよう注意を払って、そそくさと体操着へと着替えていく。

スルスルツ、ムクツ……

（どうしよう……オチンチンがこんなに膨らんじやったまま、なかなか収まってくれないよおつ。やっと女の子として仲間入りだって出来たはずなのに……）

そつと脚を持ち上げながら新品のブルマに脚を通して、そのままショーツの上へと覆い尽くしていく美穂だけど焦りの気持ちを抱えたまま、どうしてもぎこちない素振りを見せてしまう。

ずつと懂れていたとは言え、穿き慣れないブルマを下半身に穿き込んだ感触や、何よりも勃起したオチンチンを女子達に気づかれないうように振る舞わなければいけなかった。今でも表面を熱くさせながら盛り上がっている股間は、紺色のブルマからでも盛り上がりを見せつけてくるせいで、美穂は体操着に着替えた後ですぐさま身を屈めてしまう。自分でも収めることが出来ないオチンチンの勃起を、美穂はどうしても女子達の前で隠し通したかった……

* * *

「男子達つてば……随分張り切ってグライダーなんて回ってるわね？」

「もう子供じゃないって言うのにねえ。美穂ちゃんはあるはしたない真似なんてしな

いわよね？」

やっと体操着へと身を通すことが出来た美穂は、女子達と一緒に列を作りながら体育の授業を受けていた。

男子達が鉄棒の周りに集まって競い合っていたのを話題にお喋りを続けていた。

思春期を迎えた年頃にも関わらず、未だに子供っぽい遊びを繰り返している男子達の様子を、女子達は呆れ気味な様子で眺めては言葉を交わしていく。

「う、うん。ボク、あまり体育の授業も得意じゃないから。鉄棒であんなに回ったりなんて出来ないよ……」

周囲にいる女子達に交ざるように返事を返していく美穂だけど、今でも気持ちは上の空だった。

今日から女の子として過ごすことを決めた美穂だけど、体育の時間も女子達と一緒に整列したまま過ごす状況に緊張を感じていた。

今まで憧れを抱いていた分、必死に女の子としての素振りを続けていた美穂だけど、下半身の状況がどうしても気掛かりになってしまう。

体育座りを続けながら、美穂は閉ざした両脚をなかなか緩めることが出来ない……

ギョツ。

（もうお願いだから元に戻ってよお。みんなと一緒にブルマだって穿けたのに。このままじゃ女の子達に気づかれちゃう……）

今でも美穂のオチンチンは勃起状態を続けているまま、ブルマの上からも膨らんだ形状を目立たせていた。

本来なら女の子として存在しないはずの膨らみを女子達に感づかれてしまえば、自分も結局は男の子だと言う事実を悟られてしまう……あられない事実を隠すことに美穂は必死だった。

ピタリとしたブルマからどうしても浮かんできてしまうオチンチンの存在を隠そうとして、美穂は体操着の裾を伸ばして下半身を隠そうと努めてみせる。

普段から女子達が呟いていた、ブルマの着用を恥じらう意味合いを美穂は今さら思い知らされていた。

（でも、みんな……あんなに可愛い下着なんて着ちゃってたんだ。キャミソールじゃなくって、ブラなんて……）

股間の激しい膨らみを一刻も抑えたい美穂だけど、今でも激しい胸の高鳴りに襲われて、下半身の盛り上がりは一向に収まる気配を見せない。

どんなに気持ちを逸らそうとしても、数分前に見せられた女子達の下着姿が頭から離れず、今でも美穂の気持ちを支配していたのだ。

数分前にためらいもなく明かしてきた女子達の下着姿を頭に思い浮かべるたびに、美穂は下半身が熱くなる感覚に見舞われて、ブルマの内側で激しい勃起を続けてしまう。

悶々とした感情から逃れられないまま、美穂は体操着姿のままで塞ぎ込むことしか出来ない……

「美穂ちゃん、体操着の裾をブルマの中に入れないと先生に叱られちゃうわよ？」

顔を俯かせている美穂に向けて、そつと女子の一人が話しかけていく。

真新しいブルマをやつと身に着けた後なのに、体操着の裾を伸ばして隠している美穂の姿を女子達は気に掛けていた。

体操着を着崩していると、行儀の悪いと先生に怒られてしまうと注意を促しながら、そつと体操着の裾に手を近づけていく。

「い、いやっ！　ちゃんとボクが直すから……あうんっ！」
フルフルフルッ。

不意に体操着の裾を掴まれたことで、美穂はすぐさま慌てふためいてしまう。

今でも身をこわばらせながら、女子達の追及を逃れようと必死な美穂だけど、大した抵抗も出来そうにない。

気づいたら近くに寄り添った女子が手を回して、腰の辺りを少しずつ探り始めていた。

「きゃんっ！ 美穰ちゃんのお股、すっごく膨らんじゃってるよ?!」

「どれどれ……本当だ。美穰ちゃんのおチンチンが、こんなにブルマを膨らませちゃってるだなんて」

美穰がモジモジしている様子も構わずに、体操着の裾を直そうとしていた女子達は、ついに下半身のとんでもない事情に気づき出してしまう。

体操着の裾をブルマの中に収めようとしていた矢先に、美穰の股間が明らかに膨らんでいるのを感じ始めていた。

自分達なら決して考えられない現象を目の当たりにした後、女子達は何度も美穰の顔を覗き込んで、さらには悲鳴までぶつけてくる。

女の子として持ち合わせてない代物が、美穰の穿いているブルマの上からでも丸分かったのだ……

「そ、そんなぁ……もうお願いだから見ないでよおっ」

カアアツ……

周囲にいる女子達が大騒ぎを始めたせいで、美穰は思わず身を縮ませてしまう。

自分でも恥ずかしい股間の様子を、これ以上は女子達に覗かれたくなかった。

今でも体育座りを続けたまま肩をすくませる美穰だけど、周囲にいる女子達は興味本位で覗き込んで、股間の部分をしっかりと目立たせている事実を確かめてくる。

女の子として決して許されない現象を思い知らされて、美穰の気持ちは慌て出してしまふ……

「ふふつ、美穰ちゃんったら照れちゃつて。それでもオチンチンってば、こんなに膨らんじゃうものなんだね？」

「私達の中でも美穰ちゃんだけでもんね？ お股にオチンチンを生やしちゃつてるのつて。ブルマの中はどんな風になっちゃつてるんだらう……」

すっかり怖じ気づいている美穰に対して、クラスメート達はさらなる言葉を浴びせて

くる。

どんなに可憐な姿に身を投じていても、美穰はやはり男の子だと言う事実を女子達も思い知らされる。

体育の授業中だと言うことも忘れて、女子達は周囲で続々と噂話を繰り広げては、美穰の股間を面白がつて覗き込んでくる。

どんなに可愛らしい装いを続けていても、股間の部分を膨らませる様子から、やはり美穰が男の子だと言う事実を思い知らされる。

自分達があまり目にしたことのないオチンチンの形状に、彼女達もすっかり興味を抱きこんでいたのだ。

ムクムクムクツ。

（どうしてなの？ 女の子達に見つかって恥ずかしいのに、ボクだって元に戻したいって願ってるのに、どうしてオチンチンは言うことを聞いてくれないんだろう……）

クラスの女子達が次々に視線を向けてくる状況を思い知らされて、美穰の気持ちは震

え上がってしまう。

今まで必死の思いで隠し続けていた股間の膨らみを、ついに女子達の手で暴かれてしまい、さらには周囲にも知れ渡ってしまったのだ。

懂れていた女の子の格好を続けられて喜んでいた矢先、美穂はあまりにも惨めな方法で自らの性別を思い知らされていた。

どんなに激しい動揺を抱え込んでいても、股間の盛り上がりが少しも収まらないまま、美穂はただ茫然とさせられるしかない……

* * *

「ねえ、美穂ちゃん。どうしてブルマのお股をこんなに大きくさせちゃったの？」
「もしかして、美穂ちゃんのおチンチンが病気になるっちゃったのかな？ブルマの中がすっごくパンパン」

やっと体育の授業が終わった後にも関わらず、美穂はクラスの女子達に周囲を連れら

れるまま、体育倉庫の片隅に追いやられてしまった。

周囲を女子達に取り囲まれたまま、普段着に着替えることすら許されず、恥ずかしいブルマ姿を延々と覗き込まれる。

美穂は今でも立ち尽くしながら、激しい勃起を少しも収められずにいたせいで、股間の辺りを不自然に膨らませたままだった。

「い、イヤあつ。もうお願いだからボクを離してよおっ……!」
フルフルフルッ……

女子達に周囲を取り囲まれたまま恥ずかしい質問を受けて、美穂の気持ちはすぐさま焦り出してしまふ。

どうしてブルマの上からでも目立つほど、オチンチンを膨らませたのかと女子達から問い詰められても、美穂はまともな受け答えすら出来ない。

身体を壁に押し付けられたまま、女子達から続々と覗まれるたびに美穂の気持ちはすぐみ上がって、発する声もひとりでに震え上がっていく。

女子達の質問にどう答えれば良いのか、今の美穰には少しも分からずにいたのだ……

「どうしても私達に教えてくれないのね、美穰ちゃんってば……きつとエッチな気持ちになっちゃったんでしょ？　こんなにオチンチンが膨らんじゃってるのって」

なかなか自分達の質問に上手く答えられず、ずっと困ったような表情を浮かべる美穰に対して、女子達は別の切り口から本心を探ろうと試みる。

美穰の身体をしつかりと取り押さえた上で、女子の一人が前に立ち塞がりながら、美穰の抱え込んでいた気持ちを探り始めていく。

どうして美穰がブルマの上からオチンチンを勃起させたのか……きつとエッチな感情を抱いたせいで、興奮した気持ちを下半身に漲らせてしまったはずだと女子達は言い切ってみせる。

今でもブルマの股間部分を盛り上げている原因を言い当てると、女子は不敵な笑みままで美穰に向けていく。

「そ、そんなあ。ボクだって少しも分からなかったのに。どうしてエッチなことを考えてたなんて……!」

ついに女子達の手で暴かれた本心に、美穂は今までにない動揺を見せてしまう。

ずっと憧れていた女の子の格好を学校の中でも続けていた美穂は、自分でも気づかぬうちにエッチな感情を抱え込んでいたのだ。

最初は一人だけで楽しんでいた女の子としての装いを、教室内でクラスメート達とともに過ごすうちに気持ち舞い上がっていき、気づいたらはしたない部分を反応させていた。

自分でも気づかぬうちに勃たせてしまったオチンチンを女子達の前でも晒した上、抱え込んでいた気持ちまで思い知らされた後では、美穂は女子達の前で何も言い返せない。

「えっ、美穂ちゃんのオチンチンがおかしくなったのって……エッチなコトなんて考えちゃってたせいなの?！」

「きつと私達と一緒に着替えしてた時だよ。美穂ちゃんってばずっと眺めてたみたい

だし」

言葉を詰まらせてしまう美穰に対して、女子達はさらに言葉を重ねていく。

可憐な装いを続けながら自分達とともに過ごしていたはずの美穰が、どうして今頃になつて男の子の本性を見せつけてしまったのか、女子達はすぐにでも原因を突き止めておきたかった。

お互いに話を繰り広げるうちに、女子の一人がある事実に気づき始めていた——美穰が自分達とともに体操着へと着替えていた際に、教室内で見せつけた下着姿をうらやましそうに眺めていたと言うのだ。

どんなに自分達と同じ格好を続けていても、エッチな本性をどうしても隠せない美穰に対して、さらに女子達は囁し立ててくる。

「あううつ……ご、ゴメンなさいっ！　ボクはただ、みんなの着けてるブラがうらやましかっただけなのに……」
フルフルフルツ……

睨みを利かせてくる女子達の雰囲気に押される形で、ついに美穂の気持ちが届いてしまう。

女子達が指摘していたとおりに、美穂は幾度もの下着姿を見せつけられた後から、ひとりでに股間を熱くさせながら膨らませていた。

最初は自分でも身に着けたことのないブラに憧れていただけに、気づいたら女子達の下着姿から目が離せなくなってしまう、今までになく胸を躍らせていたのだ。

ついに自ら抱え込んでいた感情を女子達に暴かれた以上、美穂はすぐに頭を下げながら謝るけど、女子達は少しも身を離そうとせず、震える肌をじっと睨みつけてくる……

「しょうがないわね、美穂ちゃんってば……私達がオチンチンの病気を治してあげるから、ちよつとだけ大人しくしててね？」

エッチな感情をついに白状した美穂に対して、女子達はさらなる仕打ちを仕組んでくる。

自分達の下着姿に欲情した事実を嫌がるより先に、ブルマの表面から窮屈そうに膨らませている美穰のオチンチンへと興味をそそられていた。

どれだけ美穰があられもない感情を自分達に抱いているのか……紺色の生地からでも形状が浮かぶ代物を目にするだけで、女子達は今までにない感情を漲らせてしまう。

美穰の身体をしつかりと取り押さえたまま、一人だけでは決して逃れられないのを良いことに、女子の一人がそつと手を差し伸べて、美穰の股間へと近づけていく……

「そんな、一体どんな方法でオチンチンを……あひいんっ！」

コシユコシユコシユツ……

続々と女子達に迫られる状況から抜け出せないまま、美穰はさらなる行為を身に受けてしまう。

抱え込んでいたエッチな気持ちが静まるおまじないと称して、女子達の手で勃起したオチンチンを弄られ始めていたのだ。

不意に敏感な部分を撫でられた美穰は思わず悲鳴を洩らすけど、決して女子達が逃し

てくれないまま、ブルマ越しに何度も股間を撫でられ続けて、ついには竿の部分をつきり掴まれてしまう。

さらに女子は上下に擦りながら、先端の部分を握るような仕草まで押し付けてくるせいで、美穂はつい背筋を震わせながら喘いでしまう。

「聞いたことがあるんだ。確かこうやってオチンチンを弄ってあげるとエッチな気持ち収まるんだって？」

「私も知ってる。オチンチンを触ると気持ち良いらしいんだよね。もしかして美穂ちゃんも気持ち良くなっちゃうのかな？」

オチンチンを弄り回す指先の感触を身に受けるたびに、分かりやすい反応を見せつけてしまう美穂に女子達も興奮を募らせていく。

今まで触れたことすらなかったオチンチンの形状をブルマ越しに確かめながら、美穂が目の前で喘ぐ様子も覗き込んでいく。

保健体育の授業で習っただけでは確かめられない、美穂の勃起したオチンチンの固い

感触に気づかされながら、抑えられない興味を女子達は続々と向けていく。

今までにないような表情を見せつける美穂の姿に、女子達はすっかり魅入られていた。予想していた以上の固さを誇っているオチンチンの存在や、どう弄り回せば美穂が気持ち良くなるのか、女子達はますます興味を湧き上がらせていく……

シュコシュコシュコッ……

「あ、あうんっ……！ もうお願いだから許してよお、このままじゃボクの……が、おかしくなっちゃうよおっ！」

いたずらに女子達の手で敏感な部分を弄られるたびに、美穂はますます喘ぎ声を発していく。

女子達の手で羽交い締めにしたまま、面白がってはしたくない部分を弄られる状況を強いられて、美穂は少しも逃げ出すことが出来ないまま困り果ててしまう。

ずっと女の子として振る舞い続けようと心に決めていたにも関わらず、女子達の姿にエッチな感情を抱え込んで、はしたない男の子の部分まで弄られ続ける……美穂にはあ

まりにも耐え難い状況だった。

さらには自分以外の手で敏感な部分をしごかれ続けるせいで、面白がって視線を向けてくる女子達の前で、美穂はさらなる恥ずかしい姿を見せてしまいそうだった……

ヒクヒクヒクツ、カクカクツ！

「い、イヤあんつ……！」

女子達の手を少しも拒めないまま、美穂は今までにない喘ぎ声を張り上げていく。ブルマ越しに激しくオチンチンを弄られたせいで、ついには射精まで起こしてしまった。

本来なら女の子としてありえない現象まで引き起こされた後でも、美穂は女子達に敏感な部分を弄られる感触のまま全身を震わせて、さらに下半身からは激しい迸りを生み出していく。

大事な部分がジンジンするのに合わせて、オチンチンの先端から続々と精液が飛び出していき、穿いているショーツの内部へと溢れてくるのだ。

オチンチンを勃起させただけでなく、ついには女子達の前で射精の瞬間まで晒してしまい、抱え込んでいた興奮が少しずつ収まるとともに、激しい後悔の念に美穂の気持ちに襲われていく。

きめ細やかな感触だったショーツの内側にはしたない液体を溢れさせて、ベツトリとした感触を全体に広げてしまった。

気持ちが少しずつしぼんでいく最中でも、美穂のオチンチンからはヌルヌルした液体が続々と飛び出してはショーツの内側へと絡み付いてくる……

スルスルスルツ……ヌチヨヌチヨツ。

「きゃんっ！ このネバネバしたのって何なの？ まさかオシツコじゃないわよね……」

「確か『せいえき』って言ってね、美穂ちゃんが気持ち良くなった証拠なんだって。オチンチンもこんなにしぼんじゃって、ショーツの中がすごいことになってる」

激しい悲鳴を上げた後でぐったりした美穂に対して、女子達はとんでもない事実まで

確かめてくる。

少しも身動きが取れないのを良いことに、女子達は美穰のブルマやショーツを脱がし始めたのだ。

端の方を掴んだまま太股まで下していくと、薄ピンク色のショーツ内に張り付いている、ねっとりとした白い液体の存在を覗き込んでいく。

保健体育の時間などで『精液』や『射精』などの単語を聞いたことがある彼女達でも、美穰が実際に絶頂を迎える瞬間を垣間見るのは始めてだった。

あれだけブルマを膨らませていたはずのオチンチンが小さく縮み上がりながら、大量の精液を表面に纏わり付かせている姿を垣間見て、嗅いだことのない二オイまで鼻に受けた後でも、女子達はなかなか美穰の下半身から離れようとしなない。

目の前で自分達と同じ格好を続けていたはずの美穰が、ブルマ越しに激しい勃起を続けた末に、軽くオチンチンをしごいただけで射精まで果たしたのだ。

自分達なら決して執り行えないような現象を思い知らされて、女子達もますます美穰への関心を抱いていく。

モジモジモジッ。

「も、もうボクから離れてよおつ。恥ずかしいところなんて見ちゃダメえ……えううっ」

ついに女子達の前でも晒した恥ずべき姿に、美穂の気持ちはすっかり縮み上がってしまった。

今朝に女子としての立場を与えてもらった後、念願だった女の子としての振る舞いを続けていたはずの美穂だけど、下半身を勃起させていた事実を女子達に暴かれた上、はしたない姿までも晒していたのだ。

女子達からの想像出来ないような仕打ちを思い知らされた後、美穂は激しい動揺に駆られてしまい、気づいたら瞳から涙まで零し始める。

本来なら女の子として許されない姿を晒された後では、今の美穂はどう自分が振る舞えば良いのか少しも分からない。

今でもショーツの内部で纏わり付く精液の感触が、美穂には恨めしくてたまらない：

…

第3話

「二人ともいらつしやい？ 今日はいつとも違う状況のままで過ごしてたから疲れちゃったでしょう？ 何の遠慮もいらないから休んじやつてね？」

香瑠と美穰が今までと違う性別のまま過ごした後、やつと学校から戻ることが出来た。さすがに二人とも疲れた様子だったので、先生は二人を車へと乗せた後、自分が住んでいるマンションの一室へと連れ込んでいく。

今でもなかなか緊張を崩せない香瑠と美穰の姿を確かめながら、そつと二人の肩を押していく。

「ほ、ホントに上がっちゃって大丈夫なのか？ それじゃあ、お邪魔します……」
「それならボクも、失礼します……」

先生に連れられる形で部屋の中に入ろうとする香瑠と美穰だけど、どうしても遠慮がちな態度を取りながら、玄関の中に脚を踏み入れるのもためらってしまふ。

今までと違う性別を与えられた二人は、先生に預けられる形で一緒に過ごすよう義務付けられていたのだ。

初めての状況に不慣れだけでなく、自分達が望んでいた性別として振る舞い続けたにも関わらず、クラスメート達に受け入れられなかった事実が未だに尾を引いていた。

「今日からここが、香瑠ちゃんと美穂ちゃんの済むお部屋になるんだから。ちゃんと二人の着替えもお家から預かってきたのよ？」

なかなか元気を取り戻せない香瑠と美穂の姿を確かめながら、先生はさらに部屋の中を案内していく。

どうして先生が二人を預かることになったのかと言うと、真逆の性別として学校内で過ごすに当たって、自分が二人を預かりながら一緒に過ごさせることで、互いの性別を自然に分からせてあげる狙いがあった。

家族からも認めてもらった上で、預かってきた二人の着替えまで見せつけていく——当然ながら香瑠は男の子っぽい格好で、美穂は女の子のお洋服だった。

放課後から元気を失った二人に、どうしても気持ちを取り戻してもらいたかったのだ。

「もう、二人とも。帰りのホームルーム辺りからずっと元気がなかったじゃない。一体今日は何があったのかしら？」

俯いた顔を引き上げてくれない二人に対して、先生はそつと質問を投げかける。

今朝のホームルームではあれだけ前向きだった香瑠と美穂が、放課後にはすっかり元気を失くしている原因を話すようにと仕向けていく。

二人の身にどんな出来事が引き起こされたのかを、すでに先生は知り尽くしていた――それでも今までと違う生活を送ることになった香瑠と美穂に、どうしても今日の出来事を振り返って欲しかったのだ。

「せ、先生。それは……ううっ」

「ごめんなさい、先生。どうしても言いづらくって……」

今までと違う性別で一日だけ過ごしてみた感想を尋ねられても、香瑠も美穂もなかなか言葉を発することが出来そうにない。

やつと男子達と気兼ね無く触れ合えると思い込んでいた香瑠は、あられもないイタズラを強いられた挙げ句、自分でも知らない下半身の事実を否応なく思い知らされていた。香瑠も同様に女子達と触れ合いながら、自ら望んでいた姿で振る舞い続けていたにも関わらず、男の子として避けられない現実を思い知らされた上での辱めを身に受けていたのだ。

二人ともお互いに顔を見合わせながら、恥ずかしい事実を告げられない気持ちを思い知らされる……

「ふふつ、さすがに言いづらいかしら？ それじゃあ香瑠くん、どうして体操着姿のまなのかしらね……？」

なかなか返事を返してくれない香瑠と美穂に対して、先生は別の切り口から質問を投げかけていく。

すでに体育の時間が終わっているにも関わらず、未だに体操着姿だった理由を香瑠に尋ね始める。

新品の短パンが嬉しかっただけではない別の理由を、先生は無理にでも香瑠から聞き出すつもりでいた。

「そんなあ、オレから言わなきゃいけないだなんて。すつごく恥ずかしくつてたまらないのに……」

体操着姿を続けている理由をしつこく尋ねられて、香瑠は仕方なしに返事を返している。

先生が指摘していたとおりに、香瑠は体育の時間を終えた後でも体操着姿を着込んでいる、とても大切な理由を抱え込んでいた。

傍にいる美穂からも視線を投げかけられるまま、先生の質問に渋々答え始める香瑠だけど、このまま恥ずかしい理由を明かして良いものか未だに戸惑ってしまう……

「そんなあ、香瑠ちゃんってば……男子達にお股なんて踏まれちゃったの?!」

香瑠の口から開かされた事実には、美穰はすぐさま驚きの声を上げてしまう。

何と香瑠が言うには、一緒に過ごし続けていた男子達から電気アンマのイタズラを仕掛けられて、ついには粗相をしでかしたせいで体操着に着替えているらしい。

いくら『男の子』として過ごしていた香瑠でも、まさか敏感な部分を何度も足蹴にされたと思うだけで、美穰も思わず心配を寄せてしまう。

「美穰ってば、そんなに驚くなよ。オレだって悔しいんだからな。体育の授業じゃオレが一番だったのに、いくら仕返しでもあんなにオレの……くうっ!」

あまりにも驚きの表情を浮かべる美穰に対して、香瑠はさらに言葉をぶつけていく。

運動神経なら決して男子達に引けを取らないはずだと自信ありげだった香瑠だけど、

男子達のイタズラにどうしても耐えられずに下半身が屈した事実など、本当は自分でも思い返したくなかったのだ。

今でこそ気持ちを立て直すことが出来た香瑠だけど、股間を上履きで何度も踏みつけられて、激しい痺れに見舞われた感覚だけは拭い去ることが出来ない。

直に穿いている短パンのザラザラした感触を身に受けるだけで、下半身に走った刺激を思い返してしまうほどの衝撃だった……

「それで香瑠くんつてば、ずっと体操着姿のままだったのね？ 新品のブリーフやホットパンツも台無しにしちゃうなんて、さすがに可哀想かもしれないわね……」

体操着姿でいる理由を打ち明けてくれた香瑠のために、先生はさらなる事情を付け加えていく。

男子達の激しいイタズラに屈してしまった香瑠を、実は先生が保健室へと連れ込んで体操着姿へと着替えさせてあげたのだ。

さらにはオシッコで濡らしたブリーフやホットパンツも乾かした後、おみやげとして香瑠の手に握らせたまま一緒に帰ることにした。

最初は本人が望んでいた男子としての立場だけど、あまりにも惨めそうな香瑠の姿を

目の当たりにして、先生もさすがに同情を抱え込んでしまう。

「香瑠くんだけじゃ可哀想だから、お次は美穂ちゃんも話してくれるわよね？」

ビニール袋に包まれたおみやげを抱えている香瑠を尻目に、先生は美穂にも話を振ってみることにした。

一見は朝と同じような格好だった美穂の変化を、先生はすでに知り尽くしていた。恥ずかしい告白をやり遂げた香瑠と同様に、美穂にも今日の出来事を語ってもらいたかったのだ……

「は、はい。最初は女子達の仲間入りが出来て、とっても嬉しかったんです。それでもボク、どうしてもエッチな気持ちを抑えられなくなっちゃって……きやんつ！」
ヒラッ。

不意に先生から話を振られた美穂は、香瑠が傍にいる状況を恥じらいながら、女の子

として過ごし続けていた時の状況を話し始める。

朝早くから教室内でお披露目していた女の子の格好を、最初こそは女子達にも褒めてもらっていた美穂だけど、香瑠が告げていたのと同じような辱めを身に受けていた。

肝心の部分を告げようとする際に、自分でもどう説明すれば良いのか迷っていた矢先、不意に先生がスカートの裾を捲り上げてくる。

先生の行為を恥じらっていた美穂だけど、すでにスカートの中身を見せつけられた後だった……

「それで美穂ちゃんは、ショーツの代わりにずっとブルマなんて穿いちやってるのかな？」

先生は香瑠の下半身をスカート越しに覗き込んで、今朝とは明らかに違う下半身の状況に視線を向ける。

朝は薄ピンク色の下着を身に付けていたはずの美穂が、何故か今は紺色のブルマを穿き込んでいた。

どうしてショーツの代わりにブルマを穿いているのか、さりげなく美穠に尋ね始めていく……

「先生つてば、恥ずかしいです。だって女子達がボクの……大きくなっちゃったオチンチン、あんなに弄ってくるんだもん。折角お気に入りショーツを穿いてきたのに、台無しにしちゃった……」

先生からさらなる質問をぶつけられて、香瑠はすぐに言葉を詰まらせてしまうけど、自らの恥ずべき理由を告げることしか出来ない。

今朝に下半身を覆っていたショーツは、自ら撃ち放った精液で台無しにしてしまったので、代わりにブルマを直穿きするしかなかったのだ。

体育の時間の女子達から指摘されるまま、勃起したオチンチンをブルマ越しに弄られて、いたずらに射精姿まで明かされた事実など、今思い出すだけでも香瑠は恥ずかしくてたまらない。

元の大きさに戻ったオチンチンに押し付けられる、ブルマの裏地によるごわごわした

感触を身に受けるたび、香瑠は何度も情けない気持ちを呼び起こされる。

「そんな、美穰もオレみたいにお漏らし、しちゃったのか……?!」

美穰が仕方なしに洩らした告白を受けて、香瑠はすぐに言葉を重ねていく。

男の子として過ごそうとしていた自分とは真逆に、女の子として振る舞おうとしていたはずの美穰も、自分と同じ目に遭わされると驚かされずにいられない。

面白半分に激しい電気アンマを仕掛けてきた男子達と同じく、女子達も美穰に対してのイタズラを仕掛けてきたのかと思うだけで、香瑠も悔しい気持ちを募らせてしまう。

「う、うん……お漏らしとはちょっと違うんだけど、でも似たようなことだと思う」

目の前で戸惑いの表情を浮かべる香瑠に対して、美穰はさらに自ら抱え込んでいた気持ちを明かしていく。

ずっと女の子としての振る舞いを続けたかった美穰だけど、結局はオチンチンの勃起

を女子達に指摘させられた上、激しく弄られて挙げ句に射精姿まで晒してしまった……精液まみれのオチンチンを幾度も覗かれる辱めに、美穂の気持ちはすっかり落ち込んでいたのだ。

男子達から激しいイタズラを強いられた香瑠と同様に、結局は女子達から受け入れてもらえなかった状況を振り返りながら、美穂も一緒に肩を落としてしまう。

「もう、折角私が二人のために新しい性別を与えてあげたって言うのに、どうして香瑠くんも美穂ちゃんも落ち込んでるのかな？」

すっかり落ち込んでいる二人の様子を眺めながら、先生はそれでも香瑠と美穂を慰めていく。

たとえ今日は失敗したとしても、今までと違う性別のままで過ごし続けることを、香瑠も美穂もずっと望んでいたはずだった。

やっとお互いの願いが叶えられたにも関わらず、たった一回程度の失敗で自らの思いを手離さないで欲しいと二人の前で言いつけていく。

「そんなあ、だってクラスみんなが……オレ達を認めてくれないから。あんな恥ずかしいイタズラなんて仕掛けられちゃって」

「きつとボクもいけなかったのかも。女の子に憧れてただけなのに、あんなに……はしたない部分なんて大きくさせちゃったから」

先生から投げかけられた言葉に、香瑠も美穂もすぐさま反論をぶつけていく。

たとえ自分達が望んで身に受けた立場でも、クラスメート達から少しも受け入れてもらえずに、結果的には耐え難い辱めを強いられるなど考えもつかなかった。

男子達から激しいイタズラを仕掛けられたり、女子達から興味本位で大事な部分を弄られるなど、香瑠も美穂も嫌でたまらない。

それでも今までと違う性別のまま過ごす約束を交わした以上、これから教室の中でどう過ごし続けられればいいのか、二人はずっと迷い続けていた。

「このままクラスの人々と馴染めないままだと困っちゃうわね……どうせだから二人

のために、お互いの身体をしつかりと教え込んであげた方が良いかしらね？」

必死に何かを訴えようとしながら、なかなか自分の意見をまとめられない二人に対して、先生はさらに言葉を重ねていく。

香瑠と美穰が身に受けることになったトラブルも、自分達本来の性別をしつかりと理解してないせいで引き起こされたのは明白だった。

自ら望んだ性別として過ごし続けるに当たって、香瑠と美穰には男女の違いを改めて勉強させてあげる必要があるはずだと先生は言い出しながら、思いついたばかりの行為へと取り掛かっていく……

* * *

スルスルスルッ。

「あうんっ……先生ってば。どうしてオレの服なんて脱がせてくるんだよおっ」

身に着けていた体操着を先生の手で脱がされ始めて、香瑠はすぐに戸惑いの表情を見せてしまう。

上に着ていたシャツだけでなく、ついには半ズボンにも手を掛け始めてきた先生に対して、香瑠は慌てた拍子で言葉をぶつけていく。

男女の違いを先生の手で教えてもらう名目で、まさか自分の身体を確かめられるなど思いもしなかった。

どんなに香瑠が慌てふためいても先生は手を離さず、ついには半ズボンまで腰からずり下ろしてくる。

先生から仕向けられた仕打ちに、必死に抗おうと振る舞う香瑠だけど、どうしても裸体を確かめられるのが恥ずかしくてたまらない。

ブリーフすら穿いてない股間を晒された後で、香瑠は思わず顔を火照らせてしまう。

「せ、先生。いきなり香瑠ちゃんのハダカなんて見せられちゃっても……ボクも困っちゃうよおっ」

目の前で顔を赤らめ始める香瑠の姿を前にして、美穰も思わず顔を背けてしまう。

いくら自分達に男女の違いを教え込むためでも、まさか香瑠の身体を使つて説明するなど考えられなかった。

自らの顔を両手で覆い隠しながら、それでも足りずに香瑠から顔を遠ざけようとする美穰だけど、それでも香瑠が洩らす声に誘われるまま、思わず視線を吸い寄せられる。

顔を塞いでいるはずの指先から、香瑠の露わにした肌を思わず覗き込んでしまう……

「ダメよ、美穰ちゃん。これも大事な勉強の一つなんだから。しっかりと香瑠くんのありのままを見てもらいたい。ちゃんと見てあげてね？」

突然の状況に慌てふためく美穰に対して、先生はあられもない行為を言いつけていく。

どんなに必死の思いで顔を逸らそうとしても、きっと美穰も興味をそそられているはずだから、香瑠の身体を通して男女の違いを確かめてもらいたかったのだ。

たとえ美穰が恥ずかしく感じてても、しっかりと香瑠の裸体を確かめて欲しいと先生は切り出してくる。

「せ、先生……本当に香瑠ちゃんのハダカなんて、見ちゃっても良いって言うの……？」

美穰が顔から少しずつ両手を離すと、何の衣服も身に付けてない香瑠の姿が視界に飛び込んでくる。

膨らみかけの乳房や細い手足など、思春期を迎えたばかりの裸体を目の当たりにするだけで、美穰は自然と意識を吸い寄せられてしまう。

さらには普段から男勝りだったはずの香瑠が、すっかり顔を赤らめている表情にも視線を向けていく。

ムニムニユツ。

「あ、あうんっ……そんなところなんて触らないでよおっ。オレだって気にしてるって言うのにいつ……」

目の前にいる美穰が視線を奪われているのを良いことに、先生はさらに香瑠の身体を

見せつけていく。

そつと胸元の方に手を回すと、まだ膨らみかけな乳房を少しずつ揉み解し始めてきた。不意に先生の手で身体を抱き締められた上、最近になって膨らみ始めてきた胸元を弄られるたびに、香瑠はすぐさま声を震わせる。

どうしても自分で顧みたくなかった事実を、先生の手で無理矢理に確かめさせられて、さらには目の前にいる美穰の前でも見せつけられる状況に、香瑠の気持ちはどうしても焦り出してしまふ。

本来なら男の子として振る舞うのに邪魔な存在だった乳房の存在を、先生の指先でありありと思い知らされる上に、敏感な乳首までも僅かに震わせていく……

「ダメよ、香瑠くん。ちゃんと大人しくしててね？ さすがに大事な年頃を迎えてるから、オッパイも少しずつ膨らんできてるのね」

すっかり瞳を潤ませながら、今でも自分の元から逃げ出そうともがく香瑠に対して、先生はさりげなく注意を促していく。

どんなに香瑠自身が拒み続けたとしても、思春期を迎えて成長を始めた乳房の存在は無視出来ないはずだと先生は突きつけてみせる。

さらには指先でそつと摘まむようにして、淡い色を保っている乳首を転がしていき、どれだけ女の子の身体が敏感なのかを香瑠に教え込んでいく。

最初は必死に嫌がり続けていた香瑠だけど、丹念に乳房を揉み続けるうちに、段々と抗う気持ちまで失ってきたらしく、ついには自分の身を預け始めてきたのだ。

「香瑠ちゃんのおっぱい、こんな形してるんだ。とってもキレイで、うらやましいかも……」

先生の手で幾度も香瑠の乳房を揉み解される状況に、美穂はすっかり魅入られてしまった。

普段からボーイッシュなはずの香瑠でも、胸元に膨らみかけな乳房を携えている事実を思い知らされて、美穂はますます視線を向けていく。

香瑠の見せてきた女の子らしい部分に、美穂はうらやましい気持ちを抱え込んでいた

のと同時に、もつと女の子の身体を知り尽くしたい興味まで沸き上がってくる。

気づいたら先生の手で抱き締められている香瑠の裸体を、胸元から下半身の方まで舐め回すように視線を向けていた。

「もう、美穰までオレの恥ずかしいところなんて見るなよおっ……ひううんっ」

モミュモミュッ……

あまりにも熱心に裸体を覗き込んでくる美穰の姿を恥じらいながら、香瑠は少しも先生の手から逃れることが出来ない。

女の子としての自分自身をあまり顧みることがなかった香瑠は、人前で丸裸にさせられた上で身体を弄られることで、今までにない感覚を思い知らされていた。

先生の手で優しく胸元を揉み解されるだけで、今まで感じたことのない感触を何度も身に受けて、そのたびに香瑠は身悶え始めてしまう。

少しでも自分の気持ちを取り戻したかった香瑠だけど、どうしても震えた声が抑えられない……

「ちゃんと見てあげてね、美穂ちゃん。香瑠くんはれっきとした女の子だからオッパイも膨らみかけてるの。あとは大事なお股の部分も触ってあげないとね？」

美穂から向けられる熱い視線を恥じらいながら、目の前で悶え続ける香瑠に対して、先生はさらなる行為にも及んでいく。

今まで膨らみかけの乳房を弄り続けていた指先を、お腹やおへその辺り、さらには下腹部まで撫で回すように向かわせると、ついには股間の辺りにも手を添えてきた。

きつと香瑠自身も触れる機会の少なかった部分を弄り回してでも、女の子としての意識を教え込んであげようと目論んでいく……

スリスリッ。

「ひううんっ……！　先生つてば。オチンチンも付いてないお股なんて弄らないでよおっ……あううんっ！」

少し膨らみかけているのが気になつていた乳房だけでなく、ついには股間の辺りまで先生の手で弄り回されて、香瑠はさらなる悲鳴を洩らしてしまう。

オシッコを出す部分としか認識してなかった部分に指先が這い回っていき、軽く押し広げられた中身の部分に指を差し入れられるだけで下半身が震え上がっていき、同時に香瑠は上半身を揺り動かしていく。

まだ自分でも触れたことのなかった部分を、先生の手であっけなく弄り回されてしまい、今まで身に受けたことのない感覚にも見舞われて、香瑠はどうしても身悶えが抑えられない。

くすぐったい感覚が数倍に高められたような感覚に、香瑠はすぐにでも身体がおかしくなりそうだった。

クリユクリユッ。

「こんなに敏感な部分なんだもん。男子達に踏みつけられるなんて可哀想だから。私の手で優しく触ってあげるからね？」

今まで上げたこともないような悲鳴を洩らし始めた香瑠に対して、先生はさらなる責めを敏感な部分へ押し付けていく。

指先でしっかりと押し広げた大事な部分に指の腹を押し付けながら、丹念に香瑠の内側を探り続ける。

きつと男子達から電気アンマを強いられた時に、生まれて初めての絶頂に達してしまつたはずだと思ひ込みながら、大事な部分を労わるかのように指先で撫で続ける。

香瑠があられもない悲鳴を洩らしながら、太股を僅かに震わせ続けて、きつと一人だけでは立っているのも大変だと気づいて、さらに先生は香瑠の下半身を抱え込んでいく。気づいたら香瑠は先生に体重を預けながら、少しも自分から腰を持ち上げられなくなつていた……

「い、イヤあつ！ もうお願いだから。オレの恥ずかしいところなんて触らないでよおつ……あひいんつ！」

大事な部分を幾度も弄られ続けたせいで、香瑠はさらに激しい身悶えを続けてしまう。

先生の柔らかい指先によつて、触れるか触れないかの優しい手触りで股間を撫で回されながら、香瑠は数時間前に男子達に仕向けられたイタズラの内容を思い返してしまう。数時間前に男子達からの電気アンマを受けた時と同じように、身体の内側から揺さぶられるような感覚を押し付けられて、すぐにでも香瑠の気持ちが届いてしまひそうだった。

上履きの底で激しく股間を踏みつけられた時と同じような感覚を、どうして先生の指先で撫でられる時にも身に受けてしまうのか、今の香瑠にはどんなに考えても理解出来そうにない……

「美穂ちゃんにも見せてあげるわね？ 香瑠くんのお股って普段は閉じてるけど、こうして開いてあげると……こんな形になつてゐるのよ？」

どんなに口で嫌がり続けても、少しも喘ぎ声が収まってくれない香瑠の姿を確かめながら、先生は目の前にいる美穂も誘ひ始める。

ずっと自分達の行為に視線を奪われていた美穂に、香瑠の下半身をさらに見せつけて

しまおうと思い込んでいたのだ。

香瑠の震える脚をしつかりと広げた後、二本指でしつかりと股間を押し広げていき、中身の部分を美穰の前へと押し付けていく。

今でも美穰は顔を赤らめながら、好奇心を漲らせるままに香瑠の大事な部分へと視線を向けてくる。

「せ、先生。本当にボク、香瑠ちゃんのお股なんて覗いちゃって良いんですか……?!」

先生の手で明かされた香瑠の股間に、美穰は少しも興味を抑えられなくなっていた。

女の子の股間を一度も覗き込む機会などなかった美穰は、自分では持ち合わせていない形状を目の当たりにした後で、先生の言葉に従うまま顔を向けていく。

閉ざされていた部分を先生の指先によって押し広げられると、ピンク色の空洞に沢山のヒダが連なっている様子や、さらに上の方に豆のような部分が付いている事実までも教え込まれていく。

今でも先生の手で抱き締められたまま、少しも身動きが取れない香瑠に悪いと思い込

みながら、美穰は好奇心のままに股間の形状を目で追い続ける。

「別に構わないわよ？　これも二人にとって大切なお勉強なんだし。香瑠くんにもちゃんと見せてあげないとね……自分で確かめたことはあるかしら？」

あまりにも美穰が顔を近づけてくる様子に、先生は思わず笑みをこぼしてしまう。

異性の股間を一度も見たことのなかったはずの美穰には、少々刺激が強すぎたかもしれないと思い知らされた先生だけど、自分なりの授業をすぐには止める気にならない。

とても研究熱心な美穰とともに、香瑠自身にも自ら抱え込んでいる下半身の状況を教え込んでいく。

「そ、そんなあ……オレだって見たこともないのに。美穰や先生の前でこんなに見せちゃって、恥ずかしくてたまらないよおっ」

モジモジモジッ……

先生から鏡まで向けられながら、香瑠は自らの股間に抱えている股間の形状を思い知らされてしまう。

男子達がぶら下げているオチンチンなどとは違い、左右の肉に挟まれた溝のような形状を見せつけられて、香瑠は今までにない感情に襲われてしまう。

さらには先生の手で中身をこじ開けられて、身体の内側が見透かされるような空洞の様子や、さらには上に着いている小さな豆のような器官まで見せつけられて、香瑠はさらなる激しい感情を抱え込んでいく。

自分でも垣間見る機会のなかった股間を探られる行為が、どれだけ恥ずかしい状況なのかを香瑠は思い知らされていたのだ。

「ダメよ、香瑠くん。自分の身体なんだからしっかり確かめてあげてね？ この小さなお豆とか、オチンチンみたいでしょ？ でも指で軽く触れてあげるだけで……」
クリユクリユツ。

身体の火照りが少しも収まらない香瑠に対して、先生はさらなる責めを押し付けてい

く。

股間の形状をありありと見せつけた後で、さらに女の子の部分を香瑠に理解してもらうために、ついには空洞の中身にまで指先を滑り込ませてきたのだ。

香瑠にも分かりやすいように股間を押し広げながら、丹念に内側を探り続けていき、普段は奥底に隠れているクリトリスに手を触れると、軽く指の腹で撫で回してみせる。

「だ、ダメだってばあ。あくううんっ……！」
フルフルフルッ……

女の子にとってのオチンチンに当たると言う部分を弄られると、香瑠は今までにない悲鳴を響かせてしまう。

先生の指先が大事な部分に這い回るたびに、今まで身に受けたこともないような感覚に襲われてしまい、足下に用意された鏡を覗き込むことすら出来ない。

それでも先生の指先に挟まれた、小さな豆のような部分の感触を幾度も思い知らされて、香瑠は少しも身悶えが収まってくれない。

男子とは明らかに違う器官を弄られるだけで激しい感覚を身に受けて、香瑠の気持ちは着実に弱り果ててしまう……

ヌチュヌチュヌチュッ……

「うわぁ……香瑠ちゃんの大事な部分が、どんどん濡れてきてる。もしかしてオシッコ、我慢出来なくなっちゃったの？」

目の前で露わになった股間を丹念に撫で回すうちに、美穂は香瑠の身に引き起こされた異変に驚かされる。

内部が空洞状になつている香瑠の股間から、少しずつ液体が滲み出してきたのだ。

ピンク色の表面が艶々したかと思えば、先生の指先にも纏わり付いてくる液体の正体に、美穂はさらなる好奇心をかき立てられていく。

「み、美穂つてば。そんな恥ずかしいことなんて言うなよおっ！ 別にオシッコなんかじゃないのに……きゃふうんっ！」

モジモジモジッ、又チュ又チュッ……

不意に美穂から指摘された事実を恥じらいながら、香瑠はなおも股間から液体を溢れさせてしまう。

先生の指先が段々と滑っていく感触を思い知らされた香瑠だけど、まさか自分の股間から湧き上がってくる液体によるものとは思わなかった……それでも目の前にある鏡を覗き込むと、確かに股間が何かしらの液体で濡れ始めていたのだ。

自分でもわけの分からないうちに溢れ出る液体に、香瑠はさらなる恥じらいの気持ちを抱え込んでしまう。

「さすがに美穂ちゃんも分からなくて当然だね？ 香瑠くんのお股から出ている液体は、オシッコとはちよつと違うもので、エッチな気分になった時にどうしても出てきちゃうのよ？」

今までになく慌てふためく香瑠に対して、先生は股間からこんこんと溢れる液体の正

体を教え込んでいく。

香瑠が股間から湧き上がらせている液体の正体は『愛液』と言うもので、香瑠自身がエッチな感情を抱え込んでいる時に分泌されるものだと言いつけてみせる。

まだ女の子の仕組みを理解出来てない香瑠のために、先生はさらに滑る指先を這わせ、いき、香瑠に今まで以上の刺激を与えようと仕組んでくる。

「そ、そんな。別にオレ、エッチな気持ちになんてなっていないのに……ひゃうんっ！」
カクカクカクッ……

不意に先生から指摘された感情に、香瑠は思わず慌てふためいてしまう。

自分でもあまり触れたことのない股間を弄られただけで、まさかエッチな感情に浸ってしまふなど、香瑠はどうしても納得出来なかった。

それでも先生の指先を敏感な部分に押し付けられるたびに、香瑠は激しい身体の火照りに抱え込んで、さらには激しい胸の高鳴りまで襲われていた。

このまま先生の手で下半身を弄られてしまえば、自分の身体がどうにかなってしまい

そうだった……

クニユクニユクニユツ。

「ダメよ、香瑠ちゃん。ずっとお股に隠れてたオチンチンを弄ってあげるだけで、こんなにエッチな気持ち溢れてくるんだもん。途中で止めちゃうのも勿体無いはずだから、もっと気持ちよくさせてあげなくっちゃ？」

未だに口では拒み続けながら、エッチな気持ちを少しも抑えられない香瑠のために、先生はさらに指先の動きを激しくさせる。

香瑠の体内へと指先を押し進めながら、探り当てたクリトリスを執拗にこね回していき、さらには身体の外へ引き出すように指先でかき回していく。

すでに香瑠の股間からは止め処なく愛液が溢れ続けていき、内側がすっかり火照りきっていたので、あと少しで香瑠を高みへと誘うことが出来そうだった。

「だ、ダメってばあ……ひやはあんっ！」

カクカクカクツ、プシヤアアアア……！

先生から幾度となく与えられる刺激に、ついに香瑠の気持ちが屈してしまった。

丹念に股間を撫で回された挙げ句、香瑠は人生で二度目の絶頂を迎えてしまい、激しい喘ぎ声とともに下半身を震わせていき、周囲に大量の液体を撒き散らしていく。

男子達から押し付けられた現象を、先生の手でも同じように再現させられてしまった。激しい感情の昂ぶりを抑えられないまま、香瑠は愛液とともにオシッコまで溢れさせてしまい、少しも股間の熱い迸りを止めることが出来ない。

女の子の身体を教え込むために強いられた愛撫によって、香瑠は見事な絶頂の瞬間まで明かしてしまった。

「あらあら、香瑠くんってばまたお漏らししちゃったの？ 普段は男の子っぽくっても、やっぱり身体は女の子なのね？」

ついにはオシッコを溢れさせながら絶頂を迎えた香瑠に、先生はそつと言葉を投げか

けていく。

普段は男勝りなはずの香瑠が、股間を軽く弄られただけで可愛げな姿を見せてしまう様子に、先生も熱い気持ちを抱き始めていた。

今でも香瑠はオシッコの水溜まりに腰を落としたまま、下半身を激しく震わせたまま少しも身動きが取れずにいたのだ。

フルフルフルツ……

「そ、そんなあ。先生つてばヒドいよ。オレの身体をこんなにおかしくしてくるだなんて……えううつ」

ついに先生の手で激しい刺激を与えられた香瑠は、思わず瞳から涙を零し始める。

今朝に男子として過ごす決意を固めたにも関わらず、少しも男の子として振る舞えない事態を思い知らされただけでなく、香瑠は女の子の感覚にも目覚めてしまったのだ。

どんなに拒もうとしても、未だに股間が激しい痺れに見舞われるまま、はしたなくオシッコや熱い液体を垂れ流してしまう自分自身の弱さを、香瑠は否応なく思い知らされ

てしまう……

第4話

「ね、ねえ。香瑠ちゃん……本当に大丈夫なの？」

ついに香瑠の絶頂姿を目の当たりにした後、美穂は思わず不安げに声を掛けていく。香瑠が全身を震え上がらせながら、股間の溝部分からオシッコを噴き出すほど、激しい絶頂を迎えた姿を美穂も思い知らされていたのだ。

今でもあられもない格好で息を切らし続ける香瑠に対して、どうしても心配を寄せずにはいられない。

フルフルフルッ……

「えううつ……お願いだから見ないでくれよおつ。オレのみつともないところなんて、くううつ！」

美穂から不意に声を掛けられた後、香瑠はすぐさま顔を背けてしまう。

自分の股間にはオチンチンらしき器官が一切存在しないばかりか、女の子としての身

体を思い知らされた後で、香瑠は惨めな気持ちに駆られることしか出来なかった。

今まで触れたこともない部分を先生の手で弄り回された挙げ句、ついには熱いオシッコまで溢れさせるなど、香瑠にとっては屈辱でたまらない。

今でも香瑠は美穰の前で裸体を晒したまま、泣き伏せることしか出来ずにいた。

「美穰ちゃん、もしも香瑠くんが可哀想だっと思うなら……美穰ちゃんの大事な部分を今度は見せてあげようね？」

香瑠が目の前で泣き暮れているのをよそに、先生は不意に美穰の傍へと身を寄せる。瞳から涙を零すほど女の子の身体を思い知った香瑠の次は、美穰にも同じような行為を仕組んでいく。

男の子っぱい振る舞いを少しも出来ずに、今でも泣き崩れている香瑠のためにも、たつぷりと美穰の下半身を探り尽くしてしまおうと先生は目論んでいた。

グイッ。

「せ、先生。お願いだから離してくださいってば……いやあんっ！」

不意に先生から抱き締められて、美穂はすぐに慌てふためいてしまう。

目の前で惨めな姿を晒している香瑠のように、今度は自分の身体も弄ばれようとしていた事实に、美穂はすぐさま背筋を震わせていく。

それでも気づいたら先生の手で抱き締められるまま、穿いていたスカートをあっけなく持ち上げられてしまう。

ムクムクッ。

「ダメよ、美穂ちゃんってば。香瑠くんだけじゃ不公平でしょう？ ……ふふっ、これだけ大きく膨らませちゃってるなら、きっと授業のし甲斐もあるかもね？」

先生の行為に少しも抗えないまま、美穂はあられもない下半身を開かされてしまう。

必死の思いで香瑠を庇おうとしていた美穂だけど、穿いているブルマ越しにでも分かるほど、下半身では激しい勃起が繰り広げられていた。

新品のブルマでは窮屈そうな膨らみを目の当たりにした後で、先生は不敵な笑みまで浮かべてみせる。

女の子では決してありえない膨らみを露わにする美穂の姿を目にするだけで、ここまですり上がりつついる下半身なら『男の子の部分』を幾らでも見せつけられそうだと先生は思い込んでいた。

「そ、そんな。先生つてば……イヤあんっ！」
スルスルスルッ、フルンッ。

先生の目論見を思い知らされた後で、美穂はさらなる事態に見舞われてしまう。
ブルマ越しでも恥ずかしくてたまらないオチンチンの状態を、ついに先生の手で暴かれてしまった。

下半身を覆い隠していたブルマを太股まで下されると、すでに激しい勃起を繰り広げていたオチンチンが、美穂の下半身でしっかりとした存在感を見せつける。

ついに暴かれてしまった恥ずべき状況に、美穂は思わず慌てふためいてしまう。

「み、美穰……こんなに大きなオチンチンなんて抱えたまま、今までずっと過ごし続けていたのか……?!」

ついに目の前で姿を現したオチンチンの姿に、香瑠はすっかり視線を奪われていた。目の前で顔を赤らめる美穰の表情と裏腹に、想像していた以上に突き上がっているオチンチンの形状を、香瑠は幾度も思い知らされてしまう。

美穰が肌を震わせるたびに、勃起したオチンチンが何度も腰の辺りで揺れ動くのだ。

「い、イヤあつ！　お願いだからボクの……はしたないところなんて見ないでよおっ！」

目の前で不思議そうな票所を見せてくる香瑠に対して、美穰はすぐさま悲鳴を洩らしてしまう。

本来あるべき性別とは別に、女の子っぽい振る舞いに願望を抱き続けていたにも関わらず、男の子としての自分自身を晒される状況が美穰には恥ずかしくてたまらない。

それでも美穂は激しい勃起を収めることが出来ずに、今でも先生に身体を取り押さえられたまま、目の前にいる香瑠にもありありとオチンチンの存在を見せつけていた。

今でも香瑠が下半身に視線を向けてくる状況が、今の美穂には何よりも辛くてたまらない……

「だ、だって美穂のオチンチンが……こんなに大きいものだなんて思わなかったから。それにお股の間ですつと揺れてて……きやんっ！」

あまりにも大きく膨らむ美穂のオチンチンに、香瑠はすっかり魅入られてしまった。美穂が腰をくねらせるたびに、すっかり張り上がった形状が目の前で揺れ動くのだ。男の子として扱ってもらいたいと思ひ込んでいた香瑠でも、まさかオチンチンがここまで巨大なものだとは思わず、美穂の下半身に視線を向けたまま、間近に押し迫るような雰囲気を押されて悲鳴まで上げてしまう。

「あううつ……香瑠ちゃん。本当にごめんなさい。それでもボクの身体、どうしても言

うことを聞いてくれなくて……!」

フルフルフルッ……

不意に悲鳴まで浴びせてきた香瑠に対して、美穂はすぐさま謝ってしまう。

本来なら女の子としての振る舞いを続けなければいけない自分が、香瑠の前ではしたない姿を晒したまま、少しも自分の手で下半身を取り繕うことすら出来ない。

さらにはオチンチンの激しい勃起を続けた理由が、今でも目の前で裸体を晒している香瑠が原因だとは、美穂は口が裂けても言えなかった。

今でも下半身を覗き込んでくる香瑠に対して、美穂はひたすら言い訳を重ねることしか出来ない……

「あら、もしかして香瑠くんつてば。本物のオチンチンを見せられて驚いちゃったのかしらね? それでも美穂ちゃんがぶら下げているオチンチン、こんなに膨らんじやうものなんだから?」

美穰の可憐な見た目とは裏腹に、下半身ではしっかりと興奮を漲らせている姿を目の当たりにして、先生も思わず笑みをこぼしてしまう。

目の前に存在するオチンチンを前にうろたえ始めた香瑠に対して、先生はさらなる事実を口に始める。

どうやら傍にいる香瑠も男の子になりたがっているのに、オチンチンに関する予備知識を少しも持ち合わせてないようなので、普段はここまで大きい形状ではないはずだと口にする。

今でも瞳を輝かせている香瑠に対して、先生も段々と興奮を漲らせていく。

「それでも普段はこんなに大きくはないはずなのよ。このままじゃパンツの中にも収まらないはずだから……どうして美穰ちゃんがオチンチンを大きくさせちゃったか、香瑠ちゃんには分かるかしら？」

さらに先生は話を続けて、どうして美穰がここまでオチンチンを膨らませたのか原因も伝え始める。

普段は男勝りなはずの香瑠がひるんでしまうほど、美穰の下半身がしつかりと突き上がっていた理由を、どうしても先生は明かしたくてたまらない。

美穰が激しい勃起を続けた原因——きつとエッチな気持ちを抱えたせいで、ここまでオチンチンを膨らませてしまったのだと言う事実を掴みながら、香瑠の間に美穰の下半身を押し付けていく。

今でも美穰が恥じらいの表情を見せているけど、下半身では相変わらず激しい興奮を募らせているようで、上を向いたオチンチンが股間で揺れ動くばかりだ。

「そ、それは……オレにも分からないよ。美穰のオチンチンがこんなに大きい理由なんて」

不意に先生から尋ねられた質問に、香瑠も思わず困惑させられてしまう。

確かに先生が言うとおり、普段のオチンチンはここまで大きい代物ではないらしい——教室で男子達からふざけ半分に見せられたオチンチンを頭の中で振り返りながら、美穰の下半身が異常な状況だと気づき出す。

それでも香瑠は、どうして美穰が激しい勃起を続けているのか、その原因を考えるように言いつけられても、上手く答えを探ることが出来ない。

今でも目の前にいる美穰は怯えたような表情を見せているけど、目の前で大きく膨らんだオチンチンは収まる気配を見せない。

「確かに香瑠くんも答えづらくて当たり前のはずだよね？ それじゃあ美穰ちゃん自身に聞いちゃおうか。どうしてオチンチンをこんなに膨らませちゃったのか、香瑠ちゃんにもしっかりと教えてあげて？」

今の香瑠では分からなくて当然だと踏まえながら、先生は美穰に対して質問を投げかけていく。

どうしてオチンチンを激しく勃たせてしまったのか、きっと美穰自身が一番理解しているはずだと、先生はわざとらしく切り出してみせる。

香瑠の裸体を用いながら男女の違いを説明するうち、美穰の顔が徐々に赤らめていく瞬間を先生は見逃さなかった……その結果、下半身ではあられない状況が繰り広げて

いる事実を掴んだ上で、先生は美穰の身体も用いて授業の続きを繰り広げていた。

今でも戸惑いの表情を浮かべる香瑠に対して、すぐにでも本心を告げるよう美穰へと迫っていく。

「先生つてば。いくら何でも香瑠ちゃんの前でなんて言えないよおっ……あううんっ！」
グイッ。

とんでもない質問を先生から問い詰められても、美穰はすぐに言葉を詰まらせてしまう。

オチンチンが激しい勃起を続けてしまった理由など、まさか本人が目の前にいる状況では少しも明かせそうにない。

もしも香瑠の裸体や女の子の部分を覗き込んだ後、激しい興奮が抑えられないせいでエッチな気持ちを漲らせてしまったと告げたが最後、きつと幻滅されてしまうはずだと美穰は思い込んでいた。

すっかり困り果ててしまった美穰だけど、先生は相変わらず下半身を掴んだまま、少

しも逃してはくれそうにない……

「ダメよ、美穰ちゃん。しっかりと香瑠くんの前で教えてあげなくっちゃ。でないと二人にとつてのお勉強にならないんだから？」

目の前で焦りの表情を浮かべる美穰に対して、さらに先生は言葉を続ける。

たとえ美穰自身が恥ずかしくても、今は大事な授業の最中なのだから、しっかりと自分の気持ちを香瑠の前で明かすよう仕組んでいく。

美穰がどんな原因でエッチな感情を漲らせたのか、下半身で露わにしているオチンチン共々、香瑠がいる前でも最後まで見せつけてしまいたかった。

なかなか口を割ってくれない美穰を、先生はさらに香瑠の前へと押し付けていく……

「わ、分かりました。先生……ボク、香瑠ちゃんの女の子っぽい姿を見てるだけで、どうしてもドキドキが収まらなくなっちゃって……そのせいでオチンチンも、こんなに大きくさせちゃったんだ」

先生が抱き締めながら両手を封じてくるせいで、はしたない下半身を少しも取り繕えないまま、美穂はあられもない本心をついに口に始めた。

激しい勃起が収まらないほど、オチンチンを膨らませた原因を、ついに香瑠の前でも明かすことしか出来なかったのだ。

普段は男の子っぽい香瑠が裸体を晒した上で、先生の手で身体を弄られながら、みるみるうちに女の子の部分を見せてきたのを目の当たりにしたせいで、どうしてもエッチな気持ちを抑えられなくなってしまったと、美穂は恥ずかしくも香瑠の前で告げていく。香瑠の裸体に対して抱えていた感情を明かされた後で、美穂も下半身の状況を悔やまずにいけない。

ついに抱え込んでいた本心を告げ終わった後、美穂は思わず顔を俯かせてしまう。

「そ、そんな。どうしてオレなんかを見てエッチな気分になっちゃったんだよ？ オレなんて少しも女の子っぽくないって言うのに……」

美穰が恐る恐る口にしてきた本心に、香瑠は思わず戸惑い出してしまふ。

目の前でオチンチンをはち切れんばかりに膨らませている美穰が、まさか自分に欲情を抱いているとは少しも思わなかった。

普段から男の子っぽく振る舞っているはずなのに、美穰がオチンチンを激しく膨らませるまで、エッチな感情をずっと抱き続けていた……あられもない告白を身に受けて、香瑠はどんな反応を返せば分からず、ひたすら焦りの気持ちを抱え込むしかない。

「本当にごめんなさい。それでも……さつき見せてた香瑠ちゃんの姿、とっても可愛らしかったんだ……お胸やお股の部分とか見ているだけで、すっごくうらやましくって……」

ついに美穰の前で本心を打ち明けた後、美穰は恐る恐る言葉を重ねていく。

どんなに恥じらいの気持ちに襲われたとしても、美穰が目の前で裸体を見せつけたり、さらには膨らみかけの乳房や股間の形状まで覗き込むうちに、美穰自身も激しい興奮を漲らせてしまった。

さらには普段では考えられないような身悶える瞬間を垣間見た後で、美穰は香瑠に対して特別な感情を抱いていたのだ。

「み、美穰ってば……美穰こそオレなんかと違って、とっても可愛らしい格好してるはずなのに」

あまりにも熱い気持ちを美穰からぶつけられて、香瑠はさらに慌てふためいてしまう。普段から女の子らしからぬ素振りを続けていたにも関わらず、確かに目の前にいる美穰は自分に欲情を抱いていたのだ。

とても可愛い容姿では考えられない本心や、何よりも下半身で震わせているオチンチンの膨らみを目の当たりにして、美穰の気持ちが本心なのを香瑠も気づかされる。さらには本心が丸写しになっているオチンチンの形状を眺めるうちに、ますます胸のドキドキを激しくさせて、香瑠は少しも美穰の下半身から目を離せなくなっていた。

「ちゃんと告白出来て偉いわよ、美穰ちゃん？ それじゃあ香瑠くんにも見てもらいま

しょうね。オチンチンを弄られるとどんな風になっちゃうのか……」

香瑠へ向ける熱い告白を済ませた美穰に対して、先生はさらなる行為にも及んでいく。ついに美穰が抱え込んでいたエッチな気持ちを明かすことが出来たのだから、このまま勃起を続けるオチンチンに触れないのも勿体無いはずだと先生は思い込んでいた。

今でも美穰の下半身に注目を寄せる香瑠のためにも、オチンチンの仕組みを教え込ませてあげようと先生は口にする。

香瑠の間に美穰の下半身をしっかりと見せつけるようにして、激しい勃起を続ける竿の部分を握り締めていく……

ニギニギツ、シュコシュコシュコツ……

「い、イヤあんつ！ 先生つてば、もうボクのエッチなところなんて弄らないでよおつ……あううんつ！」

敏感な部分への感触を身に受けて、美穰はすぐさま悲鳴を洩らしてしまふ。

香瑠の前でエッチな気持ちを明かすだけでも恥ずかしかったにも関わらず、ついには先生の両手がオチンチンにも迫り始めて、全体をしつかりと握り締めてきたのだ。

さらには竿の部分を掴んだ手を前後に動かして、オチンチン全体をしごかれ始めたせいで、美穂は思わず腰をくねらせてしまう。

激しい勃起を続けたオチンチンを弄られるたびに、美穂は耐え難い感覚に襲われてくるのだ。

どんなに必死の思いで逃げ出そうとしても、背後にいる先生が少しも逃してくれず、さらには敏感な部分を弄られるたびに、腰を振じらせるのをどうしても止められない。

「ダメよ、美穂ちゃん。自分だけエッチになる瞬間を嫌がっちゃうなんて。さつきも香瑠ちゃんのエッチな姿をずっと眺めていたから、オチンチンだってこんなに大きくさせちゃったはずでしょう？」

何度も腰をくねらせてくる美穂に対して、先生は決して逃げないように言いつけながら、さらに両手で包み込むようにオチンチンを弄り続ける。

口ではどんなに嫌がり続けたとしても、下半身に漲っている興奮が少しも収まらない事実を掴んだ上で、先生は指先でしっかりと竿を握り締めていく。

このまま美穂のオチンチンをしごき続けて、射精する瞬間まで香瑠に見せつけてしまおうと考えていた。

すでに美穂がエッチな感情を抱え込んでいるのは事実だったので、欲情を抱いている香瑠の前で絶頂へと誘ってあげたかったのだ。

「そ、そんなあ。ボクだつて恥ずかしくてたまらないのに……ひうんっ！ このままじゃ香瑠ちゃんに見られちゃうよおっ……あうんっ！」

グニユグニユグニユツ、コシユコシユコシユツ……

背後にいる先生に向けて、身体を弄ぶのを止めて欲しいと必死に訴えていた美穂だけど、自分の言い分を少しも聞いてもらえないまま、下半身に受ける刺激に意識を奪われ始めてしまう。

どんなに身を振じらせても先生は少しもオチンチンをしごくのを止めてくれずに、敏

感な部分を幾度となく弄り回してくるせいで、美穰も段々と抗う気持ちが薄れていく。

前にも女の子の格好に身を投じている時に、オチンチンの辺りが急に張っていく感覚を身に受けていた美穰だけど、さすがにはしたくない部分を弄ることすら出来ず、長い時間を掛けて興奮を収めるのが精一杯だった。

それでも自分以外の手で敏感な部分を弄り回され、エッチな気持ちがますます湧き上がるせいで、このまま自分の気持ちがおかしくなる感覚を美穰は思い知らされていた。

今でも激しい勃起を続けているオチンチンが、すぐにでも爆発してしまいそうだった……

「み、美穰。ホントにオレのいる前でも、オチンチンを弄られて気持ちよくなる瞬間を見せてくれるって言うのか……？」

息を切らしながら身悶える美穰の姿に、香瑠はすっかり目を逸らせなくなっていた。

とても可憐な装いに身を投じていたはずの美穰がエッチな気持ちを抱えていただけでなく、先生の手によってオチンチンをしごかれ続けて、さらなる姿を目の前で晒そうと

していたのだ。

これから美穂の身にどんな事態が引き起こるのか、少しも想像出来なかった香瑠だけど、先生が見せようとしている行為に自分から顔を寄せていき、さらなる動向を見守っていく。

自分に欲情して勃起したと言うオチンチンの形状が、先生の両手で握られながら着々と膨らみを増すのだ。

「ご、ゴメンなさい。香瑠ちゃん……それでもボク、もう耐えられそうにないからあ……あひいんっ！」

カクカクカクツ、ビクビクビュクンツ！

あまりにも熱心下半身を見つめてくる香瑠に対して、美穂は思わず謝り始めるけど、直後にあられもない悲鳴を響かせてしまう。

先生の手で激しく弄られたオチンチンへの刺激に屈するまま、ついに美穂は絶頂を迎えてしまったのだ。

自分の意識がオチンチンの周辺だけに吸い寄せられるような感覚とともに、エッチな気持ちを募らせていた分だけ、美穂の下半身は激しい痺れに見舞われていた。

これから先生や香瑠のいる前で、どれだけはしたない姿を晒してしまうのか、今の美穂には少しも考えられそうもない……

ビクビクッ、ビュルビュルビュルッ！

（どうしよう……いくら先生に握られちゃったって言っても、ついに香瑠ちゃんの前でも見せちゃったんだ。オチンチンを弄られて気持ちよくなっちゃうところ）

下半身が激しい刺激に見舞われた直後、ついに美穂はオチンチン全体を激しく震わせるとともに、先端の部分から大量の液体を噴き上げてしまった。

敏感な部分への刺激を先生に与えられて、美穂は香瑠の前で射精の瞬間までも明かし始めたのだ。

今までエッチな感情を募らせていた分だけ、オチンチンの先端から激しく飛び出してくる液体は空中を舞い上がって、目の前にある床へと遠くまで撒き散らしていく。

大事な部分から溢れ出す液体は一度だけでは収まらず、何度も下半身を震わせるたびに噴き出しては、粘っこい白濁液を続々と周囲に飛び散らかしてしまふ。

ついに香瑠がいる前でも、はしたなく射精まで起こしてしまった美穰だけど、先生の手で弄られた余韻に気持ち支配されるまま、激しく喘ぎながら幾度もの射精を繰り返す。

フルフルフルツ、ビュルビュルツ……

「うわあ……美穰のオチンチンからこんなに液体が溢れてくる。まさかオシッコなんかじゃないよな？」

目の前で見せつけられた美穰の射精姿に、香瑠はすっかり気持ちを奪われていた。

美穰が先生に抱かれたまま身悶えるたびに、今までずっと下半身から突き上がっていたオチンチンの先端から、真っ白くて粘り気のある液体が飛び出してくるのだ。

息を切らしながら美穰がぐったりするのに合わせて、今まで大きかったはずのオチンチンが少しずつ小さくなっていき、それでも断続的に溢れ出る液体によって、床に白濁

の滴を続々と張り付いている様子まで香瑠は目にしていた。

ねっとりとした白濁液の姿や美穰のしぼんでいくオチンチンを、香瑠はいつまでも眺め続けていく……

「もう、香瑠くんってば……でも知らなくて当たり前かもしれないわね？　これは『精液』って言うってね、美穰ちゃんがエッチな気持ち溜め込んでいた、何よりの証拠だよ？」

あまりにも夢中になって美穰の下半身を見つめてくる香瑠のために、先生はさらに言葉で説明を始める。

美穰のオチンチンから溢れ出した白い液体が『精液』だと言う事実を、香瑠にもしっかりと教え込んでいく。

さらには美穰が大量の精液を周囲にオチンチンから撒き散らしてしまった理由も、香瑠のいる前でわざわざ踏まえていく……今までお披露目していた香瑠の裸体によって、美穰がエッチな感情を抱え込んでいた分、体内で精液が続々と分泌されるのだと伝えて

みせる。

不思議そうな視線を向ける香瑠に対して、先ほどのように勃起を始めたオチンチンを弄り続けると、美穰の下半身が気持ちよくなるとともに、溜め込んでいた精液が先端から勢いよく飛び出してくることがも付け加えていく。

「はあっ、はあっ、はあっ……あうんっ」
フルフルフルッ。

先生が香瑠へのあられもない説明を続けている間、美穰は思わず小さな悲鳴を洩らし
てしまう。

やつと敏感な部分から手を離してもらえた美穰は、少しずつ自分の気持ちをとり戻そ
うと必死だった——それでも激しい絶頂を迎えた後では、なかなかすぐには息を整える
ことが出来ない。

背後にいる先生に寄りかかるようにして、目の前に繰り広げられた状況を美穰は恐る
恐る確かめると、自らしでかした行為を思い知らされてしまう。

ついに美穂は、エッチな感情のままに勃起を続けていたオチンチンから、大量の精液が溢れ出る瞬間を香瑠の前でも晒してしまったのだ。

今でも香瑠の前でしぼんだオチンチンを揺らしながら、大量の精液を纏わせている様子までも晒している状況に、美穂の中で一気に恥じらいの気持ちが覆い被さってくる。

「ふふっ。やっと気持ちを取り戻してくれたみたいね、美穂ちゃん。香瑠くんの前でも立派なオチンチンを見せつけて、とっても偉かったわよ？」

目の前で不意に慌てふためく美穂に対して、先生はそつと気持ちをなだめていく。

きつと美穂自身も恥ずかしかっただろうと踏まえながら、ずつとオチンチンに興味を示していた香瑠のために、勃起や射精の瞬間まで見せてくれたことを、どうしても先生は褒めてあげたかった。

床の所々に白濁液を飛び散らせるほど、見事な射精姿を明かしてくれた美穂のおかげで、きつと香瑠も男女の違いを理解することが出来たはずだと先生は教え込んでいく。

互いの身体を熱心に覗き込んでいた香瑠と美穂の前で、先生は不敵な笑みを振る舞っ

てみせる。

「そ、そんなあ……ボク、こんな恥ずかしい格好なんて。本当はイヤでたまらないって言うのに……ぐすっ」

やっと興奮の気持ち収まった美穂は、ついに二人の前で泣き崩れてしまった。

今までずっと可憐な振る舞いを続けながら、女の子に対する憧れを募らせていた美穂にとつて、香瑠の裸体にも欲情を覚えたり、さらには勃起を続けるオチンチンをしごかれた末に射精の瞬間まで明かすなど、今の美穂にはあまりにも耐え難い状況だった。

本来あるべき自分とは真逆な姿を先生の手で暴かれた後では、瞳から涙を零すしか美穂は自分の感情を表すことが出来なくなっていた。

どんなに頑張つて女の子の振る舞いを続けても、エッチな感情が少しも抑えられなかったことに自己嫌悪すら抱え込んでしまう……

「美穂、大丈夫か？ やっぱり美穂も恥ずかしくてたまらないんだよね？」

急に泣きじゃくった美穂に対して、香瑠はそつと寄り添いながら抱き締めていく。

あられもない射精姿を見せつけた後で、情けなく泣きじゃくる美穂を香瑠は見えていられなかった。

先ほど先生の手で下半身を弄られた末に、はしたなくオシッコを撒き散らしながら絶頂を迎えてしまった自分自身と同じく、きつと美穂も惨めな気持ちに襲われているはずだと香瑠は思い知らされる。

数分前に思い知らされた気持ちを明かしてでも、香瑠は少しでも美穂の気持ちを慰めてあげたかった。

「あ、ありがとう。香瑠ちゃん……ボクこそゴメンね。きつと香瑠ちゃんも恥ずかしくてたまらなかったのに、ずっと大事な部分なんて覗き込んで……」

香瑠から丹念に慰めてもらうことで、美穂は少しずつ気持ちを取り戻すことが出来た。本来なら女の子として抱えてはいけない感情を漲らせてしまい、さらには射精の瞬間

まで晒してしまった後でも、香瑠が気兼ねなく触れ合ってくれるのが美穂には嬉しかった。

今でも香瑠は裸体を晒したまま、構わずに身体を抱き締めてくるので、美穂も恐る恐る手を回していく。

「ううん、おあいこだよ。オレだって美穂の大きくなった……はしたない部分をずっと見ちゃってたんだもん。幾らでも慰めてあげるからな……?」

美穂が秘かに募らせていた感情を、香瑠も少しずつ受け入れようと試みていく。

今でも目の前で謝り続ける美穂と同じように、勃起を続けるオチンチンをずっと覗き込みながら、自分でもエッチな好奇心を芽生えさせていた事実を香瑠も振り返っていく。

自分がオチンチンの存在しない股間を確かめられるのと同じく、女の子としての振る舞いを目指している美穂にとって、勃起したオチンチンや射精姿などは本来見てはいけない光景だと言う事実を踏まえながら、自分と同じような喪失感を思い知らされた美穂を、香瑠は幾らでも支えてあげようと思い込む……

* * *

「もう気持ちは収まった、香瑠ちゃん」

先生の手で執り行われた恥ずかしい授業から数時間後、二人はそれぞれシャワーを浴びた後、パジャマ姿で同じ寝室へと向かった。

香瑠と美穂のために用意された部屋にはダブルベッドが用意されていて、二人で一緒にベッドで眠るよう言いつけられていた。

シャワーから上がって着替えを済ませた香瑠に、美穂はそつと話しかけていく。

「あ、ありがとう。美穂……でも美穂って寝る時も可愛いパジャマなんて着ちゃうんだな？」

恐る恐る返事を返していく美穂は、可憐な装いに身を投じている姿に美穂の胸を撫で

下ろしていく。

美穂は普段着ている格好と同じく、寝る時も可愛らしいパジャマを着込んでいたのだ。本来あるべき姿に戻った美穂の様子を眺めるだけで、香瑠はやっと気持ちを落ち着かせることが出来る。

女の子としての願望を抱いている美穂を、香瑠は幾らでも氣遣ってあげたかった。

「そんなあ、可愛いのは格好だけだよ。本当は今でもボク、香瑠ちゃんのことを……うらやましくてたまらないんだから」

不意に香瑠から容姿を褒められて、美穂は思わず照れ出してしまった。

確かに見た目こそは可愛いパジャマを着込んでいる美穂だけど、身体つきこそは男の子そのものだと言う事実を思い知らされた上で、どうしても香瑠の姿が気になって仕方がない。

見た目こそは男の子っぽい姿の美穂が、ひとたび裸体を晒すと膨らみかけの乳房を携えていたり、股間に可愛げな割れ目を作り上げている姿を頭の中で振り返りながら、美

穰はすぐさま言葉を詰まらせてしまう。

お互いに身体の仕組みを思い知らされた後では、美穰も香瑠も自らの身体に引け目を感じていたのだ。

「分かってるよ、美穰。明日こそはお互いに頑張ろうな？ たとえ男子達や女子達と身体が違ってても、ちゃんとみんなに認めてもらうまでは……」

美穰の抱え込んでいる気持ちに気づいた香瑠は、二人で一緒に身を寄せながら同じベツドへと寝そべることにした。

同じベツドへと寝そべりながら、香瑠も美穰もモヤモヤした気持ちを抱え込んで、お互いに背中を向けることしか出来ない。

自分達の望んでいる性別とは丸つきり違う事実を教え込まれた後で、香瑠も美穰も恥ずかしい身体を確かめられるのを恐れるのと同時に、互いの身体が気になってしまう。

隣にいる美穰が秘かに募らせる感情と同じように、香瑠も自分には存在しないオチンチンがうらやましくてたまらない……それでも自分達が望んだ性別のまま、これから

学校内で過ごし続けられないといけないのだ。

クラスメート達から自分達の立場をどう認めてもらえば良いのか、今でも戸惑いの気持ちを抱えていた二人だけど、不安な気持ちを底い合うようにして、香瑠も美穂もお互いに寄り添っていく……

第5話

「おはよう、香瑠。オシッコまみれのパンツはもう乾いたのか？」

「また今日も懲りてないようなら、たつぷりとオレ達がお股をしごいてあげるからな？」

今日も学校を訪れた香瑠に対して、クラスの男子達が挨拶代わりにからかい言葉までぶつけてくる。

先日自分達と同じ『男子』として過ごす決意を告げてきた香瑠に対して、男の子として相応しくない事実を男子達は総出で教え込んだばかりだったのだ。

自分達がイタズラで仕掛けた電気アンマによって、はしたなく失禁姿を晒した後でも凝りないまま、本当に自分達の仲間に入る気にいるのかと揺さぶりを掛ける。

「そ、そんなにからかってくるなよ。昨日はたまたま調子が悪かっただけなんだから。今日こそは絶対に負けないんだからな？」

お漏らしをしかした事実を男子達からからかわれた後でも、香瑠はわざとらしく気

丈に振る舞つてみせる。

確かに昨日の放課後は男子達のイタズラに屈して、敏感な部分が激しく疼くまま、止め処なくオシッコを垂れ流してしまったのは忘れ難い屈辱だった。

それでも香瑠は男子達の前で威勢を張りながら、今日も『男子』として過ごし続けると言ひ張り続ける。

ギユツ。

（たとえオレの身体に、あそこまで大きなオチンチンが付いてなくなつたて……ちゃん
と男子として認めてもらうんだからな？）

昨日に先生の手によつて、男女の身体がどう違うのかを身体で教え込まれた香瑠は、男子達の姿を目の当たりにするだけで、内心は気持ちが悪え上がってしまう。

股間に少しもオチンチンが生えてないどころか、少し触れられるだけで敏感に反応してしまふ股間を持ち合わせている自分が、どう頑張つても男子達と同じようには振る舞えそうにないと薄々ながら思い知らされていた。

それでも香瑠は昨日に教室内で発表したとおりに、無理にでも『男子』としての振る舞いを続けたいと言う固い決意を抱え込んでいたのだ……

* * *

「なあ、香瑠ってば。今日もオレ達と同じパンツなんて穿いてきてるのか？」

体操着に着替える際、香瑠がまたしても自分達とともに着替えを始める姿に、男子達もすぐさま声を掛け始めていく。

どうやら香瑠は今日も『男子』として扱ってもらおうと思いつ込んでいるらしく、自分達と同じ短パンだけでなく、真新しいブリーフまで身に着けている。

それでも香瑠が衣服を脱ぎ去ると、上半身では膨らみかけの乳房を揺らしているような始末だったので、男子達も思わず視線のやり場に困り果ててしまう。

スルスルッ。

「当たり前だろ、だってオレは『男子』なんだから。別にみんなの前で着替えるのだって、少しも恥ずかしくないんだからな？」

男子達からの指摘を受けた後でも、香瑠は必死の思いで食い下がってくる。

教室内でも男の子のような格好を続けていたのと同じく、香瑠は体操着に着替える際も男子達とともにしたかったのだ。

たとえ男子達から恥ずかしいイタズラを仕掛けられてでも、自分が望んでいる性別のまままで過ごし続けたい気持ちを香瑠は周囲に見せつけていく。

「えいっ！」

さらには体育の時間も大鉄棒へ上って、香瑠はお得意のグライダーを男子達にしつかりと見せつけていく。

小柄な身体なのを生かして、香瑠は今まで以上に張り切って鉄棒を回ると、勢いを付けて手を離しながら軽やかに飛んでみせる。

香瑠は今日も体育の時間を張り切りながら、男子達への対抗意識を燃やしていた。

「うわあ……また香瑠ったらあんなにグライダーで飛んじやつてるよ」

「あんなにムキになって飛ばなくったって、香瑠の運動神経が良いことなんて分かつてるって言うのに、なあ？」

昨日と同じく体育の時間を張り切ってみせる香瑠の姿に、男子達も思わず言葉を失ってしまう。

すでに香瑠の運動神経が優れていることは知り尽くしていたにも関わらず、自分がグライダーを飛ぶ瞬間を見て欲しいとまで頼み込んだきたのだ。

仕方なしに香瑠の姿を眺めることにした男子達だけど、ここまで自分達に必死のアピールを続ける姿に、どうやって応えてあげれば良いのか分からなくなっていたのだ。

「はあつ、はあつ、はあつ……どうだった、オレの新記録。こんな距離を飛べるの、男子達の中でもオレくらいものだろう？」

大鉄棒からかなり遠くの場所まで着地した後、香瑠はすぐさま男子達の元へと駆け寄っていく。

他の男子達でもなかなか出来ないグライダーを、わざと自慢げに語り出していく。昨日は恥ずかしいイタズラを仕掛けられたせいで、少しも男の子らしくない姿を晒してしまった自分自身を、今日こそは何としても挽回したかったのだ。

「さすがだな、香瑠は。あそこまで見事に飛ぶことが出来るのは、やっぱりお前くらいしかないよ……」

あまりにも嬉しそうに騒ぎ出す香瑠の姿に、男子達は返す返事を詰まらせてしまう。どうしても男子としての振る舞いを続けたいと言う香瑠の気持ちに、男子達も思わず圧倒されていたのだ。

今でも胸を張ってグライダーの飛距離を見せつける香瑠を、仕方なしに褒めることしか出来ない。

（どうしようか。香瑠のやつ、本気でオレ達の仲間に入れてもらいたいみだいだぜ？）
（昨日だつてオレ達に電気アンマされて、あんなにオシッコをお漏らししちゃったはずなのに……今度は別の方法でも思い知らせてやろうぜ？）

自分達の前で無理なアピールを続けてくる香瑠の姿に、男子達も思わず業を煮やしてしまう。

どんなに体育の時間に張り切ったとしても、股間にオチンチンの付いてない香瑠を自分達の仲間として認めることなど出来なかったのだ。

男子達は各々で相談を始めて、どうすれば香瑠に自分達との徹底的な違いを分からせることが出来るのかを延々と話し合っていた。

休み時間も色々な相談を続けた結果、ある一つの方法を思いついた男子達は、すぐさま香瑠に仕向けてしまおうと目論んでいく……

ギョッ。

「どうしたんだよ、みんなして。またオレにヘンなイタズラでも仕掛けてくるつもりなのか？」

放課後に男子達から仕向けられるまま、香瑠は校舎裏まで呼び出されてしまった。

男子達の手でしっかりと手首を掴まれながら、仕方なしに脚を向かわせる香瑠は、待ち構えていた男子達の集団を前にひるみ始める。

今日も昨日みたいなイタズラを仕掛けられるのかと気づいて、香瑠の気持ちはずぐに震え上がってしまう。

それでも周囲を取り囲んだ男子達は香瑠を羽交い絞めにしたまま、少しも校舎裏から逃そうとはしない……

「昨日みたいに手荒な真似はしないよ。その代わりに今日とはびっきりなものを見せてやるから……」

スルスルスルッ……フルンッ。

目の前で身をこわばらせている香瑠に対して、昨日のような激しいイタズラはしないと踏まえた上で、男子達はずっと考えていた方法を実行に移す。

香瑠が傍にいる状況にも関わらず、男子達はズボンやブリーフに手を掛けていき、膝の辺りまで一気に下し始めたのだ。

男子達は香瑠のいる前でも構わず、わざと下半身を丸出しにしたまま、股間にぶら下げているオチンチンを自慢げに見せつけてくる。

「きゃんっ！ 急にズボンなんて脱いできて、オレの前でオチンチンなんて見せてくるなよおっ」

不意に男子達から見せられたオチンチンに、香瑠はすぐさま慌てふためいてしまう。自分では持ち合わせていない器官を前にするだけで、香瑠は思わず恥じらいの気持ちを抱え込んでいく。

どんなに視線を逸らそうとしても、身体を取り押さえている男子達が頭まで掴みながら、無理矢理にでもオチンチンを見せつけようと仕組んでくるせいで、香瑠も目のやり場に困ってしまう。

股間から長く伸びている形状や、皮が剥けて先っぱの部分が顔を出している様子など、目の前に差し出されたオチンチンを眺めるだけで、香瑠は今までにない感情に揺り動かされる。

美穰の身体で見せつけられたオチンチンの形状を男子達からも見せつけられた後で、香瑠はどうしても気持ちを震わせてしまう……

「別に良いじゃんか。男同士ならチンチンを見せ合うくらい、どうってことないはずだろう？」

オチンチンを目の当たりにして慌て出す香瑠に対して、さらに男子達は言葉を突きつけていく。

自分達と同じ『男子』として過ごしている香瑠なら、自分達がオチンチンを見せつけ

ても、別に恥じらう必要もないはずだと言い切ってみせる。

どんなに香瑠が威勢を張っても、自分達とは明らかに身体の作りが違うのだと、男子達は無理にでも教え込んでしまいたかった。

モジモジモジッ。

「くううつ……だからってオレの前でオチンチンなんて見せてきて、一体どんなつもりなんだよお？」

男子達から受けた指摘を耳にした後で、香瑠は今でも顔を火照らせてしまう。

確かに男子達が告げたとおりに、別に男の子同士ならオチンチンを見せ合っても恥ずかしくないはずだと、香瑠自身も気づかされていた……それでも異性の股間を目の当たりにするだけで、男の子として振る舞いたい気持ちすら忘れて、どうしても肌の火照りが収まってくれないのだ。

そんな気持ちも知らずに男子達が両手を取り押さえたまま、股間からわざとオチンチンを揺らし続けえてくるせいで、香瑠は激しい胸の高鳴りにも襲われてしまう。

「決まってるだろ、どんなに香瑠が頑張っても、オレ達の仲間入りなんて絶対に出来っこないんだから？」

「お股にチンチンをぶら下げてないのに、どうして香瑠は男子になりたがるんだよ？オレ達もずっと困ってるんだからな？」

顔を赤らめたままそっぽを向いて、どうしてもオチンチンを視界に入れたくない香瑠に対して、さらに男子達は話を切り出していく。

教室の中で『男子』として過ごす決意を発表して、無理をして男の子っぽい態度を取り続けても、香瑠の身体にオチンチンが付いてない以上は、決して自分達と同じように振る舞えないはずだと主張してみせる。

本当は女の子を相手に自らの股間を見せつける行為など、男子達も気持ちが悪く引けていたけれど、少しも事情を理解出来ない香瑠が相手では仕方がないと思い込んでいた。

「そ、それは……あううんっ！」

香瑠は男子達の言葉に圧倒されながら、思わず小さな悲鳴まで洩らし始める。

目の前で幾らでも見せつけられる男子達の股間を目の当たりにするたび、香瑠は昨日の出来事をどうしても思い返してしまう。

先生が美穰の身体を羽交い絞めにするまま、ブルマの中で勃起していたオチンチンを見せつけられた後、さらには自分に対して欲情を抱いていた事実まで聞かされ、ついには射精の瞬間までも見せつけられていた。

目の前にいる男子達もひとたびエッチな気持ちを抱き始めると、同じようにオチンチンを張り上げてくるのかと思うだけで、香瑠はどうしても言葉を詰まらせてしまう。

恥じらいの気持ちを嫌と言うほど教え込まれた香瑠だけど、目の前に差し出された男子達のオチンチンに、どうしても意識が吸い寄せられる気持ちも抱え込んでいた……

「ほらほら、香瑠も悔しかったらオレ達の前でオチンチンを見せてみるよ？　もしもオチンチンが付いているのを見せてくれたら、特別にオレ達の仲間にしてあげてもいいからな？」

目の前で視線を泳がせながら、困ったような表情を浮かべる香瑠に対して、男子達はさらなる無理難題を切り出してくる。

もしも香瑠が男子達の仲間入りをしたいなら、自分達と同じようにオチンチンの見せ合いっこをして欲しいと言いつけてきた。

本来ならオチンチンなどを持ち合わせていない香瑠には無理な行為だと知りながら、自分達の仲間入りを諦めてくれるようにと男子達が仕組んでいたのだ。

「ほ、ホントだな。オレの身体にオチンチンが付いてさえいれば、みんなの仲間に入れてくれるんだな？」

あまりにも考えられない行為を押し付けられた後でも、香瑠は男子達の前で少しも引き下がらず、必死の思いで返事を返していく。

もしも男子達の前でオチンチンを見せつけることが出来れば、自分も仲間に入れてもらえるはずだと何度も聞き返していく。

今でも男子達が股間にぶら下げているオチンチンを前にして、恥じらいの気持ちを感じていた香瑠だけど、教壇の前ですつと抱え込んでいた気持ちを発表した後で、今さら女の子の立場になど戻りたくなかったのだ……

「そんなに香瑠が言うなら、この場で見せてくれよ。ちゃんとオレ達が見届けてやるからさ？」

あまりにも必死の思いで詰め寄ってくる香瑠の姿に、男子達も面白がって返事を返していく。

そこまで香瑠が言い張るなら、自分達のいる前でオチンチンを見せて欲しいとまで頼み込んでくる。

いくら自分達の仲間入りを果たしたい一心とはいえ、香瑠の股間にも同じような代物が付いているなど、男子達には到底考えられる状況ではなかった。

「わ、分かった……ちゃんとあるオチンチンを見せるから、オレの手をいい加減離して

くれないか？」

すぐにでも証拠を見せて欲しいと詰め寄ってくる男子達に対して、香瑠は領きながら約束を果たすと言い切ってみせる。

決してこの場から逃げ出さないことを誓う代わりに、オチンチンが股間に存在している証拠を見せつけるため、まずは掴んでいる両手を離して欲しいと男子達に訴えていく。これから周囲を取り囲む男子達の前で、香瑠はあられもない股間を見せつけなければいけない……そう思うだけで全身に緊張が走るけど、自分から切り出した行為を試みる。今でも手足の震えが収まらない香瑠だけど、恥ずかしい行為をやり遂げない限りは、男子達の仲間には入れてもらえないのだ。

「全くしょうがないなあ……ほら。そこまで言うのなら本当に見せられるんだろうな？」
普通なら考えられないような香瑠の発言に押される形で、男子達も仕方なく手を離すことにした。

どうやら香瑠が言うには下半身を晒して、自分達と同じようにオチンチンを見せつけてくれるらしいのだ。

本来なら女の子であるはずの香瑠が、一体どんな方法で股間の代物を拝ませるつもりなのか、男子達も不思議そうな表情で覗き込んでくる。

「す、すぐにオレのオチンチンを見せてやるから、準備するまでちょっと待ってろよ……」

スルスルスルツ……

男子達からの視線を身に受けながら、香瑠はすぐに準備へと取り掛かる。

今でも恥じらいの気持ちを抱え込んでいた香瑠は、手元の震えが収まらないほどの激しい焦りに襲われていた……それでも目の前にいる男子達の前で、しっかりと下半身を見せつけてしまおうと思い込んでいく。

本当は誰の前でも明かしたくなかった下半身だけど、男子達の仲間に入れてもらうためには、ある代物をどうしても見せつける必要があったのだ。

恐る恐る腰へと手を掛けながら、穿いていたホットパンツとブリーフを下ろしていき、さらには自分から脚を広げた体勢を見せつけて、ついに男子達が見ている前でも構わず、あられもない股間を晒し始める……

「うわあ、香瑠ったらホントにパンツまで下してきたぞ？」

「なあ、一体どこにあるんだよ。香瑠のオチンチンは……少しも見当たらないみたいだぞ？」

ついに目の前で露わになった香瑠の股間に、男子達は続々と注目を寄せ始める。

異性の股間を目にする機会の少なかった男子達は、こぞつて香瑠の下半身へと視線を向かわせていく。

目の前で露わになった香瑠の股間にはオチンチンが生えているどころか、縦に一筋の割れ目が入っているだけで、どこにも香瑠が言い張っていたような代物の姿すら見えない。

香瑠の股間にしっかりと視線をぶつけながら、どこにオチンチンがあるのかと男子達

は口々に告げてくる。

「あ、あううつ……」

フルフルフルツ……

あまりにも恥ずかしい質問を男子達から尋ねられたせいで、香瑠はすぐさま声を震わせてしまう。

男子達の仲間に入れてもらいたい一心で下半身を露わにした香瑠だけど、自分自身の性別を思い知らされた後で、強烈な恥じらいの気持ちに襲われていたのだ。

今でも下半身の割れ目を覗き込む男子達の姿に、香瑠は思わず困り果ててしまう。

男子達との約束を少しも果たせないどころか、自分が女の子だと言う事実を香瑠は今さら思い知らされる。

下していたブリーフとホットパンツを穿き直して、すぐに下半身を取り繕いたい衝動にも駆られてしまう……

（どうしよう、ホントはオレだって恥ずかしいけど……それでも男子達の仲間に入れてもらうために。ちゃんと自分の手で見せつけてやるんだから）

男子達の前でも股間を晒した格好のまま、香瑠はどうすれば良いかをひたすら悩み続けていた。

本来なら女の子であるはずの自分には、股間のどこにもオチンチンが生えてない事実など、香瑠自身が一番思い知らされていたのだ。

香瑠はそれでも男子達の仲間入りを果たしたい気持ちだけは確かだったので、どうすれば自分を認めてもらうのか、必死になつて考えを巡らせていく。

先生に教え込まれた事実を振り返りながら、ついに香瑠は自分の身体に『オチンチン』が存在する証拠を、男子達の前で見せるための方法を思いつくことが出来た。

昨日の光景を振り返りながら、今でも恥じらいの気持ちを抱え込んでいる香瑠だけど、男子達の前で自分の立場を示すには他に方法がないのだ……

「はあっ、はあっ……この割れ目の中にいつもは隠れてるんだ。大きさもホントにちっ

ちやいけど、すぐにみんなの前で見せてやるからな、あううんっ」

クイツ……

傍にあったボールの上にしゃがんだ体勢のまま、香瑠は男子達の前でしつかりと脚を広げたまま、さらに指先で股間を開いてみせる。

今でもズボンを下したままの男子達と比べると、あまりにも小さな形状だと思い知らされながらも、香瑠は奥底に隠されているオチンチンの存在に気づくことが出来たのだ。すぐにでも男子達の前で証拠を見せようと決意を固めて、香瑠は昨日の光景を振り返りながら大事な部分を弄ってみせる——どの場所にクリトリスが存在しているのか、香瑠はすでに自分の身体で思い知っていた。

ずっと抱え込んでいる恥じらいの気持ちとともに、敏感な部分が指先に触れるだけで、すぐにでも下半身が疼き出してくる。

「はあっ、はあっ、この辺りにコリコリした感じがしたから……きゃふうんっ！」

それでも無理に指先を這わせながら、香瑠は奥底に隠されていた『オチンチン』を探り当てていく。

香瑠が男子達に見せつけようとしていたオチンチンとは、先生の手で昨日教えられた『クリトリス』だった。

普段は体内に隠れている、小さな豆のような器官を、香瑠は周囲にいる男子達の前で見せつけてしまおうと目論んでいた。

先生の手で弄られた時の様子を思い返しながら、股間の上の辺りを探るたびに、小さなしこりを指先で確かめられるけど、ほんの少し刺激を与えただけでも、下半身全体が痺れるような刺激に見舞われてしまう。

「お。おい。香瑠ってば……そんなにお股なんて弄って、ホントに大丈夫か？」

急に目の前で身悶え始めた香瑠の姿に、男子達も思わず心配を募らせてしまう。

自分達が押し付けた無理難題に答えようとしているとしても、まさか香瑠が目の前で股間を晒して、さらには指先で弄り回す姿まで見せつけるなど思いもなかった。

ずっと身悶え続ける香瑠を心配する一方、今まで見たこともないような下半身の状況を目にしたり、さらには悲鳴のような声を耳にするたびに、男子達も続々と視線を吸い寄せられていく。

「だ、大丈夫だから。ちゃんとみんなに見てもらいたいんだ。オレの身体に埋まつてるオチンチンを……ひううんっ！」
フルフルフルッ。

男子達が続々と覗き込んでくる中、香瑠はしっかりと股間を開いたまま、さらに敏感な部分を弄り回していく。

無理にでも男子達に『オチンチン』を見せつけるため、香瑠は自分の手でクリトリスを引き出そうと試みる。

先生から鏡で見せられたり、小さな豆のような器官を身体で教え込まれた香瑠は、たとえサイズが小さくても男子達の前で見せつけることが出来れば、きっと仲間に入れてもらえると思い込んでいたのだ。

普段は閉ざされている股間を両手で広げながら、上の方にあるはずのクリトリスを探り続ける香瑠だけど、普段から隠れている代物をなかなか引き出せそうにない。

それどころか敏感な部分を弄り回すたびに、香瑠はどうしても身を震わせながら悲鳴まで洩らして、どうしても手元を震わせてしまうのだ。

先生と同じ方法ですぐにでも引き出したいにも関わらず、敏感なクリトリスの辺りに走る刺激のせいで、どうしても指先が震え出すのかもしれない。

（どうしよう……自分で弄っただけでも、こんなにお股が痺れてきちゃって。それにみんなだって、ずっとオレのお股ばかり覗き込んでくるから……！）

少しも自分の手でクリトリスを引き出せずに、股間が激しく疼き出す感覚にも見舞われて、香瑠は段々とじれったい気持ちにも駆られてしまう。

まだ弄って間もない部分に指先を這わせながら、身体の内側に隠されているクリトリスを引き出そうとする行為ですら、香瑠の敏感か下半身はどうしても感じてしまう。

さらには普段なら見せないような仕草を、目の前にいる男子達にも見せつけている状

況に、香瑠はさらなる恥じらいの気持ちを抱えずにいられない。

自分が男子達のオチンチンに興味を抱いているのと同様に、きっと男子達も大事な部分が気になって仕方がないはずだ……そう思い知らされながら、香瑠は激しい胸の鼓動にも襲われていく。

それでも男子達の仲間入りを果たすために、香瑠は何としても自分の手で、体内に隠されたクリトリスを引き出さなければいけないのだ。

「はううんっ……ちゃんとあるんだから。オレのお股にもオチンチンが……ちよつと触れるだけで、身体がおかしくなっちゃうけど……あふうんっ」
クニユクニユクニユツ。

恥じらいの気持ちを必死に押さえ込みながら、香瑠は何度も股間を弄り回していく。

香瑠は男子達の仲間入りがしたために、何としても身体の奥底に隠れているクリトリスを引き出す必要があったのだ。

まだ自分でも弄ったことのない敏感な部分を指で弄るたびに、どうしても激しい刺激

が下半身に走ってきて、香瑠は震えるような声を洩らしながら喘いでしまう。

このままではクリトリスを身体から引き出す前に、自分の身体が果ててしまうかもしれない……そんな予感に苛まれながら、香瑠はひたすら指先をこね回し続ける。

激しい刺激に屈してしまいそうな感覚を堪えながら、香瑠は何度も指先を股間へと向かわせて、股間にしっかりと存在していた小さな豆を何度も探り出す。

コリコリコリッ。

「あ、あつたぞ……オレのオチンチン。指先よりちっちゃいけど、こうやって引き出すことだって、ひううんっ！」

体内から続々と溢れ出る愛液を指先に纏わせながら、必死の思いで股間を弄り続けるうちに、香瑠はやつとの思いでクリトリスを引き出すことが出来た。

股間の上半分に普段は隠れている部分だけど、目の前にいる男子達にも見やすいよう、しっかりと脚を開きながら見せつけていく。

形状こそは小指にも満たない、豆のような大きさの器官だったけど、男子達が股間に

ぶら下っているオチンチンと同じ代物だと、香瑠はありありと周囲に言い放つてみせる。両側の肉に挟まれている部分を無理に押し広げながら、敏感な部分を思いっ切り押し込むことで、穴の奥底に隠されていたクリトリスがついに姿を現してくれたのだ。

続々と男子達が覗き込む最中も両手で股間を押し広げたまま、体内が覗けるような空洞まで見せつけていた香瑠は、浴びせられる視線や外気を表面に受けるだけで、激しい刺激が敏感な部分へと身に受けてしまう。

「も、もうダメだつてばあ。きやふうんつ……!」

カクカクカクツ、プシャアアアアア……

やつとの思いで男子達に『オチンチン』を見せつけた香瑠だけど、長後に激しい悲鳴を響かせてしまう。

何度も大事な部分を探り続けた刺激のせいで、すっかり下半身が火照り上がった香瑠は、ほんの少しの刺激を身に受けるだけで、あつと言う間に絶頂を迎えたのだ。

男子達が顔を近づけてくる状況も構わず、香瑠は背筋を仰け反らせながら下半身を震

わせて、股間から続々と熱い迸りを生み出していく。

ボールの上にお尻を乗せたまま、香瑠は投げ出した下半身を激しく震わせながら、全身を走る痺れのような感覚に意識を奪われていた。

まだ激しい刺激に身体が慣れてない香瑠は、愛液だけでなくオシッコも体内から噴き出してしまうのだ……

ピチャピチャピチャッ。

「うわっ！ 香瑠ってば急にオシッコなんて噴き出してきちゃったぞ?!」

「でも見てみろよ。香瑠のお股からオチンチンが生えてたよな？ こんなにちっちゃいけど……」

不意にオシッコまで噴き出てきた香瑠の姿に、男子達も思わず驚かされてしまう。興味本位で香瑠の股間を覗き込んでいた矢先に、体内から突然大量の液体が溢れ出てきたので、間近に顔を寄せていた男子達は顔を背けるので精一杯だった。

周囲に遠慮なく飛び散るオシッコの滴を顔に受けてしまった男子達だけど、同時に香

瑠が身悶えながら果てていく様子に再び視線を寄せていく。

普段は自分達に対して生意気な態度を取っていたはずの香瑠が、目の前で可愛げな声を響かせながら、大事な部分から大量の液体を噴き出し続ける——そんな香瑠の姿を、男子達は少しも見逃すことが出来ない。

下半身オシッコまみれにした香瑠の姿を覗き込みながら、確かに股間の割れ目から小さな芽のような物体を捉えることが出来た……

「はあっ、はあっ。だから言っただろう？ オレにだってオチンチンが付いてるんだって。

だからみんなの仲間に入れてくれよおっ……！」

フルフルフルッ……

ついには絶頂姿まで晒してしまった事実、香瑠は思わず涙を零してしまうけど、それでも男子達の傍から離れようとしなない。

女の子として恥ずべき行為を繰り広げてでも、自分の身体に小さなオチンチンが存在している事実を、香瑠はついに男子達の前で明かすことが出来たのだ。

今でも全身が火照り上がったまま、男子達から向けられる視線が照れくさくてたまらない香瑠だけど、下半身を投げ出した格好のままで約束事を切り出してみせる。

男子達がぶら下げているものとは明らかに形が違うけど、オチンチンの存在を見せつけたのだから、これからは自分も仲間に入れて欲しいと男子達に訴えていく。

男子達の前で小さなオチンチンを見せつけるだけで失禁行為をしでかして、息を切らしたまま少しも動けない自分自身に、香瑠は情けない気持ちを感じずにいられない。

今でも下半身からオシッコと愛液を垂れ流したまま、自分でもみっともない姿だと思いい知らされても、男子達にどうしても追い縋りたかったのだ……

「しょうがないなあ、香瑠ってば……そんなに言うなら『弟分』として可愛がつてやるからな？」

「ちゃんとオチンチンだつて見せてもらえたしな。またオレ達と一緒にオチンチンの比べっこでもしようぜ？」

今でも必死に男の子として振る舞う香瑠の姿に、男子達も茫然とさせられてしまう。

本来ならオチンチンと呼ぶことすら難しい代物だとしても、確かに香瑠の股間には小さな豆のような器官が存在していたのだ。

股間に入っている縦筋を押し広げて、体内が覗けそうな空洞を拝ませてもらった後、さらにはクリトリスが身体から飛び出す状況やオシッコが噴き上がる瞬間など、香瑠のあられもない瞬間まで男子達は覗き込んでしまった。

今でも瞳から涙を流している香瑠の姿を目の当たりにするだけで、男子達は言い表しようにない罪悪感に苛まれていた。

香瑠の気持ちに根負けした男子達は、これから『弟分』として可愛がつてあげることが約束してみせる。

本来なら女の子であるはずなのに、誰にも明かせないような部分まで晒してくれた状況を思い知らされた後では、このまま香瑠との約束を無視することも出来なかった。

「う、うんっ！ これからもよろしくな。オレの身体に埋まつてるオチンチン、幾らでもみんなに見せてやるんだから……」

やつとの思いで男子達に認めてもらった香瑠は、嬉しそうに男子達の前で返事を返していく。

本来なら自分が女の子である事実を晒しながら、男子達の仲間入りが出来たのが嬉しくてたまらない。

まだ自分の股間に存在している小さな豆は、男子達のぶら下げている代物とは比べ物にならない事実を思い知らされながら、それでも男子達に自分の存在を認めてもらえたのは確かだった。

オチンチンの大きさを比べっこをしようと誘われた男子達に対して、香瑠は興奮気味に頷いてみせる……